〈資料報告〉

武蔵埼玉稲荷山古墳出土の埴輪 II

若　松　良　一

はじめに

前号に引き続き、埼玉稲荷山古墳から出土した形象埴輪のうち、未発表の資料について、実測図を掲げ、観察記録と合わせて、逐一報告していく。今回は家形埴輪の残りと器財埴輪を一部含むが、人物埴輪が主体である。これらのうち、後円部墳丘と墳頂部から出土した資料は昭和43年8月1日から24日に行われた第１次調査、中堤及び内外堀から出土したものは昭和48年11月7日から翌年2月24日まで行われた第2・3次調査での出土品であるが、諸般の事情で昭和55年11月刊行の正式報告書に掲載できなかった資料である。平成14年度からの再整理によって接合が進んだものも少なくない。平成15年度には合計87点の実測図作成を行った。

なお、報告資料の個別番号は資料管理の便宜上、前号からの連続番号を用いることにしたい。

I　今回報告する形象埴輪の出土状況

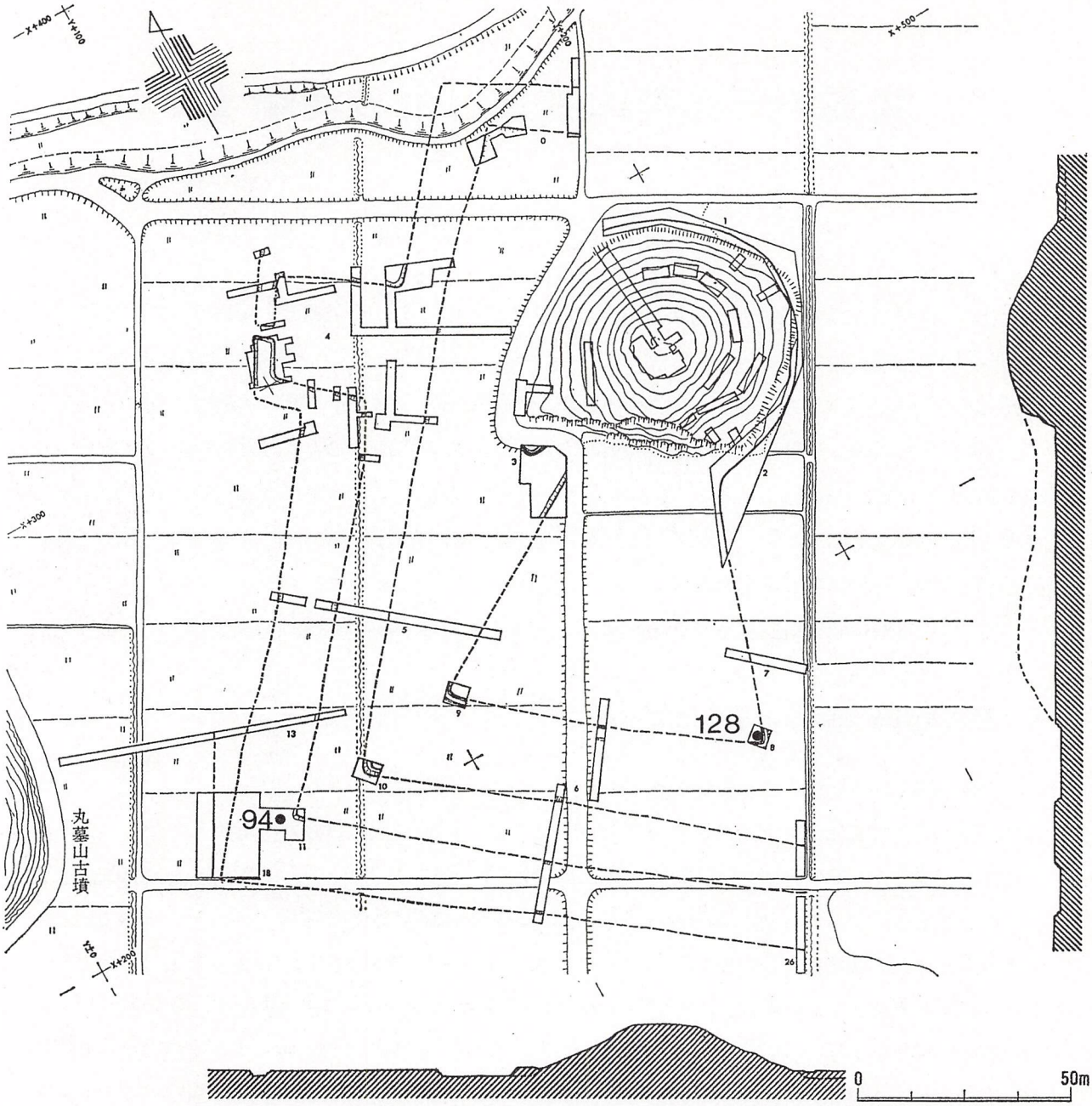
1　前方部とこれに対応する中堤付近

今回報告する形象埴輪のほとんどが後円部墳丘または中堤造り出し付近から出土している。とくに後者からの出土が多い。ほかの位置からの出土は極めてまれであるが、94の円文のある大帯を締めた人物腰帯部破片はは第１図に示したように、前方部西側隅角に対応する中堤のコーナー部に接した外堀に設定された第11トレンチから出土している。他の多くの資料と同様に、ドット図は作成されておらず、一括取り上げであるが、中堤からの転落が推定される。このことに関して、中堤造り出しと中堤のコーナーに限定して人物埴輪が配置されていたのか、西側の中堤に連続的な配置があったのかは現時点では不明であり、今後の調査課題となる。

128の馬形埴輪鞍褥部破片は前方部東側隅角に設定された第８トレンチの表土からの出土である。同一個体の鞍部のより大きい破片（123）が中堤造り出しに設けられた第４トレンチの内堀部分から出土しているので、こちらが本来の配置場所に近いものと推定される。おそらく、公園造成時の客土に含まれたものであろう。

2　後円部墳丘

後円部墳丘では合計10点の墳頂部出土形象埴輪片が今回の報告資料中にある。43の寄せ棟造りの家大棟部破片は墳頂部中央に南北方向に設定したは第５トレンチの北半部となる第１区表土から出土した。同一個体の大棟部である41と42が北側墳丘中段に設けられた第10トレンチと第11トレンチから出土している（第２図参照）ので、家形埴輪は墳頂部に配置されていたが、破片となった後に、ここから崩落したとみてよいであろう。前号に掲載した寄せ棟造りの乳白色を呈する家形埴輪片（34～39）は41～43と同一個体であり、出土位置は５Ｔ２区（粘土槨付近に対応）表土、６Ｔ１区（ほ

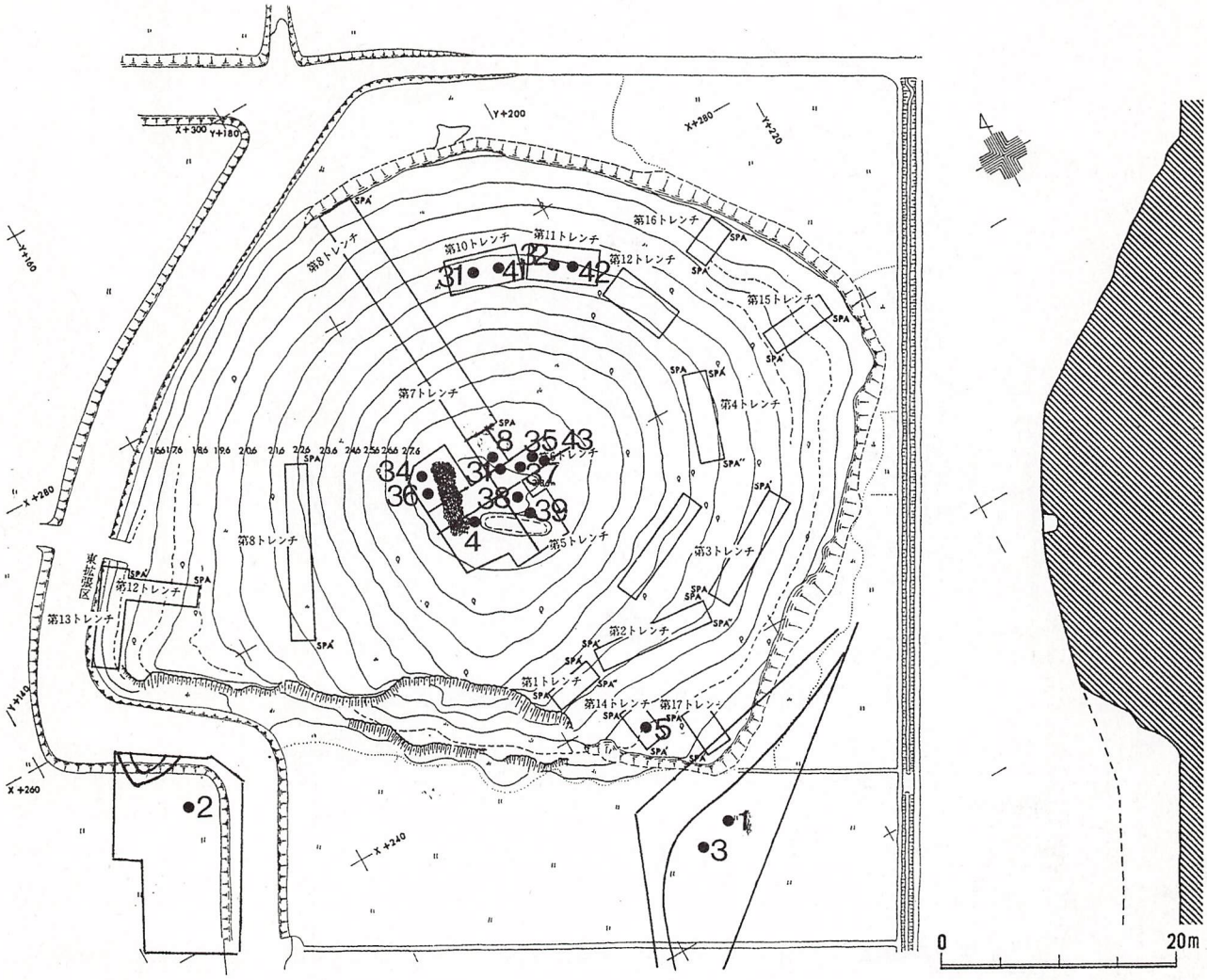


第１図　稲荷山古墳形象埴輪出土位置図１（全体）

ぼ中央部の空閑地に対応）表土攪乱、６Ｔ２区北拡張区（礫槨北半部）に分散していたので、少なくとも直径５メートル以上の散乱状況を示しており、原位置を確定することは困難である。

ところで、前号では筆者の墳頂部トレンチ配置についての誤解から、一部の記述と第１図に誤りのあることがわかった。ここにお詫び申し上げるとともに、訂正文を示し、今回報告分の家形埴輪片３点を加えた家形埴輪の出土位置図（第２図）と差し替えさせていただきたい。

前号第１ページ終わりから３行目「第６トレンチと２ｍの間隔を空け、南側に平行して設置した第５トレンチでも４点の家形埴輪片が出土している。１区（８・３１）はその東半部で粘土槨東側部と槨外東側に、２区（３８・３９）はその西半部で粘土槨中央部及び槨外西側に対応している。」を「第６トレンチと直交して、南北方向に設置した第５トレンチでも４点の家形埴輪片が出土している。１区（８・３１）はその北半部で、中央から北よりの空閑地に、２区（３８・３９）はその



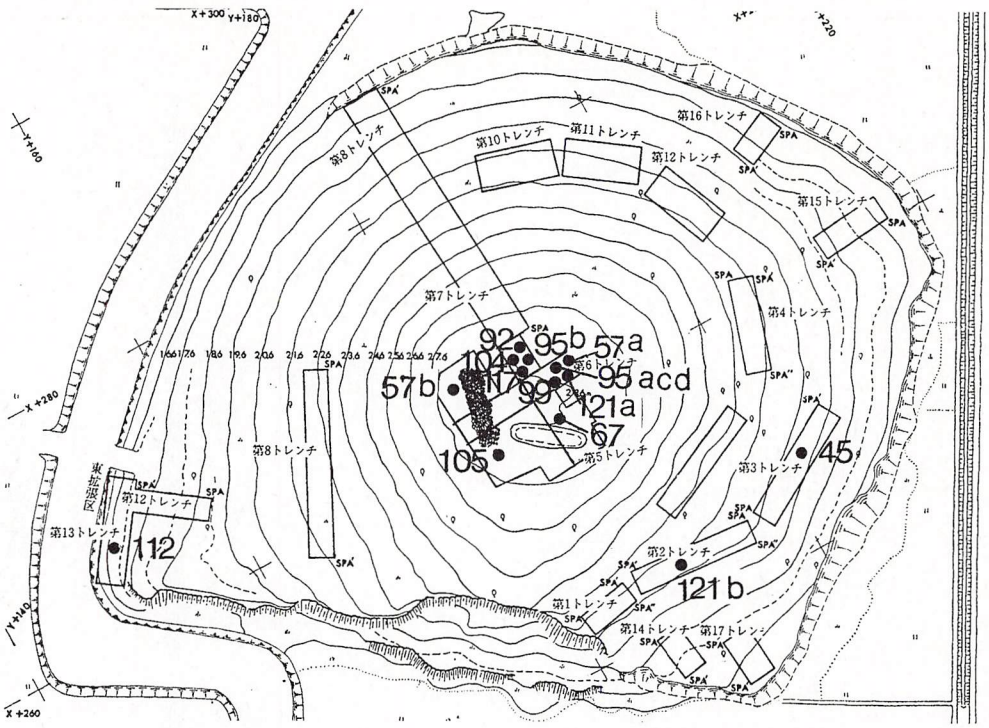
第２図　稲荷山古墳家形埴輪出土位置図（墳丘部）

南半部で、粘土槨東半部付近に対応している。」と訂正する。

さて、家形埴輪以外（第３図参照）では墳頂部の第５トレンチ１区から92の半身像人物の裾部、104の人物埴輪膊腕部、95bの斜格子文の帯を締め意須比を付けた巫女埴輪片１点、117の靫負人の負う靫破片が、第５トレンチ２区からは67の顔面を赤く彩色する人物頭部片が出土し、第６トレンチ１区からは57aの壺を頭に載せる人物の壺口縁部破片、99の人物埴輪の肩から腕の破片、95a・c・dの斜格子文の帯を締め意須比を付けた巫女埴輪片３点、121aの小型人物塑像破片１点が、第６トレンチ２区北拡張区からは57bの壺を頭に載せる人物の壺体部破片が、第６トレンチ２区南拡張区からは105の人物埴輪腕膊部が出土している。

報告書に掲載された調査日誌には「第五トレンチ二区、第六トレンチ一区は、表土から三〇～四〇センチメートルまで、かなり攪乱はされていたが、それでも人物頭部・美豆良・靫形・円筒埴輪片等が多数出土した。」という記述があり、今回報告する形象埴輪の出土状況を知る手がかりとなる。この記述の中で美豆良だけが見あたらないが、注記のない72か73の可能性があろう。

いっぽう、墳丘の南側中段部に設定された第２トレンチからは121ｂの小型人物塑像（足）、同じく第3トレンチからは45の衣蓋の笠部破片が出土しており、やはり墳頂部に配置されていたものが流れ落ちたものであろう。また、後円部西側墳裾付近（墳丘造り出しに隣接している）に設置された



第３図　稲荷山古墳形象埴輪出土位置図２（墳丘部）

第13トレンチからは112の腕が出土している。これについては墳頂部からの転落か、造り出しに配置された人物埴輪があったのか今後の調査に待つべき課題となる。

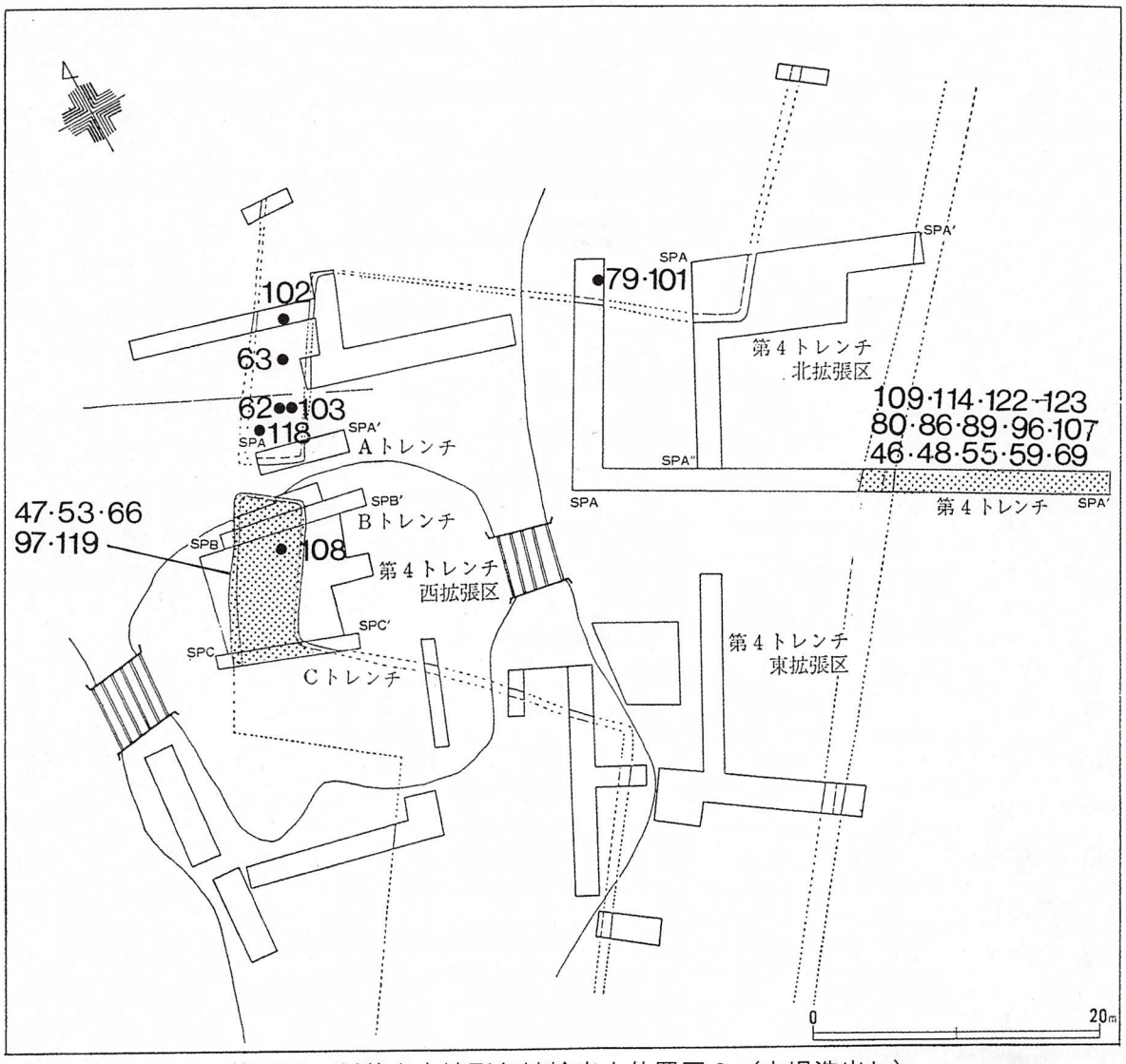
墳丘に配置された形象埴輪全体の組成や数量については次号に譲りたい。

３　中堤造り出し付近

今回報告する形象埴輪の大半は墳丘西側の中堤造り出し付近から出土したものである。このうち少数については平板実測図に出土地点が落とされている。第４図に示すように、中堤の輪郭に沿う外堀の西側部分には掘り残しのブリッジがあり、その北側部分は発掘調査時点で既に、園池が掘削されていたにもかかわらず、堀底部分が残存していて、発掘調査の結果、多数の形象埴輪が出土した。平板実測図には、15点の出土位置がナンバーを付して記録されている。今回の報告に係るものについて記せば、南側から順に、118の靫負人２、その北側に62の顎に赤彩のある坊主頭の男子頭部、これに接して103の斜め上方に掲げられた左腕、さらに北側に63の頬に赤彩のある坊主頭の男子頭部、最も北側に離れて102の右腕である。

このほかでは、第４トレンチ北端の外堀部分に「人物腕」の出土地点が記されており、79の中実製作腕と101の中空製作腕の片方または両方が該当する可能性が高い。また、108の紐状の細い帯を締め腕を前方に延ばす人物は出土状況写真に「４トレ西拡Ｂ・Ｄ間造出部外堀」という黒板の写し込みがあるために、ブリッジ南側の造り出し部外堀内でも両トレンチ間に限定することが可能である。平板図には池の中島上に南側から順に、Ａ、Ｂ、Ｃのトレンチ名が記されているが、Ｄの記載はない。おそらくＢ・Ｃ間の東側に突出する輪郭がＤトレンチのなごりで、のちに全面的な拡張が行われたのであろう。このような推定に基づいて108のだいたいの出土位置を示しておくことにしたい。

残りの報告資料については、注記に「内堀４Ｔ」とあるのは甲冑形（46・48・55）、盾持ち人埴輪の盾部（59）、赤彩された人物の鼻（69）、人物の腕（80・114）、襟首を赤く縁取る人物胸部（109）、



第4図　稲荷山古墳形象埴輪出土位置図3（中堤造出し）

人物腰部（86・89・107）、片手で壺をもつ人物から離脱した壺（96）、馬形埴輪（122・123）である。第4トレンチの内堀部分は造り出しの東側に1箇所あるだけであり、造り出しから内堀に転落したことを想定すると内堀の中でも造り出しに隣接した位置から集中的に出土したものであろう。この資料群中で少し検討を要すべきは、86が「造出部4T」と89が「池」と注記された破片と接合関係を持つことであり、107が中堤西側の外堀から出土した体部大型破片（108）と同一個体と推定されたことである。このうち、86については隣接する造り出し部と接合関係を持つことから、原位置が造り出し上であったことを示している可能性が高い。しかし、89と107にみられる遠隔地との接合関係は不自然である。両者とも造り出しを挟んだ外堀側と内堀側との接合関係であるので、何らかの2次的な移動があったとしか考えられない。107については明らかに移動したものであるが、89についてはどちらが原位置に近いかを決することができない。

注記にホワイトポスターカラーで「造出外堀」とあるのは甲冑形（47・53）、同じくホワイトポスターカラーで「造出部外堀」とあるのは細く長い首の人物頸部（66）で、細かい位置は限定できないが造り出し西側の外堀からの出土としてよいであろう。

「造出部4T」とゴム印で注記されたものに甲冑形埴輪（50）、人物腕（82・111）、人物肩（84）、

「４Ｔ造出」とゴム印と手書きを併用したものに甲冑形（49)、人物頭部（58・65)、人物腕（78・97)、人物胴部（81)、靫背人１（119）がある。これらは文字通り第４トレンチの造り出し相当部分からの出土であるかというと、出土状況を示す写真や図面がなく、逆に119の出土状況写真の写し込み黒板に「４トレンチ西拡造り出し部外外堀」とあって、造り出し西側の外堀（ブリッジ南側）出土であることが確実である例があり、97も119に接して写真に写っている。また、前述の103にも「４Ｔ造出№７」の注記法が採られていることから、外堀が省略されているものも含まれていることはまちがいない。

いっぽう、「造出」とのみホワイトポスターカラーで注記されたものに烏帽子状の被り物を付ける人物頭部（61)、鼻孔表現のない鼻（68)、人物美豆良（71)、紐状の細い帯を締め腕を前方に伸ばす人物（108)、猪形埴輪立髪（127）がある。このうち、108は前述したように４トレンチ西側拡張区のＢ・Ｄトレンチ間造り出し部外堀からの出土であることが確実なので、やはり、「外堀」が省略されたものを含むことになる。

また、「池」とのみホワイトポスターカラーで注記されたものに、幘状の被り物を付ける人物頭部(60)、人物腰部（87・90・91)、人物腕（113)、人物から脱落した弓（74)、甲冑形（51)、馬（124・125・126)、「池西側周堀」と記されたものに人物美豆良（70）がある。前者は発掘調査によるものではなく、池の工事によって不時発見されたものを含んでおり、主に破壊された造り出し北半部とこれを巡る外堀の覆土に包含されていたものと推定されるが、本来は造り出し上に配置されたものとして誤りないであろう。

このほか、小壺を捧げ持つ巫女の腕２（76）は「４Ｔ北拡池内」のラベルを伴っているので、ブリッジ北側の池内に設けられたトレンチから出土したものであることがわかる。

Ⅱ　形象埴輪の特徴

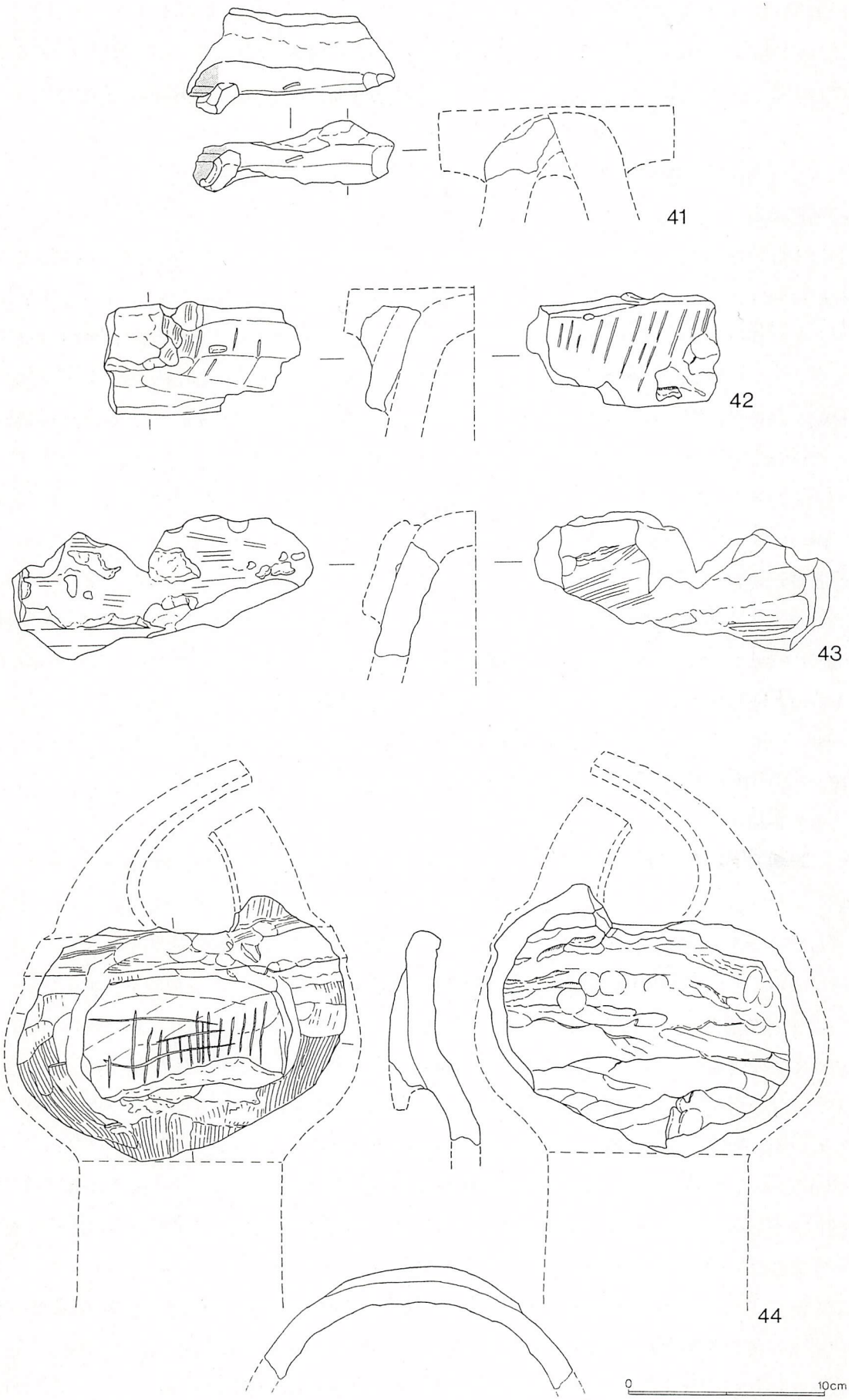
１　家形埴輪の特徴

前号で報告した家形埴輪の続きとして、３点を報告する。

○寄せ棟造り家

41は前号に掲載した寄せ棟造りの乳白色を呈する家形埴輪片（34～39）と同一個体の大棟部破片である。10Ｔ№８の注記がある。横断面形は逆Ｖ字形で、頂部は丸みを帯びている。堅魚木が剥離し、この部分のみ還元して灰色を呈している。その周囲には補強用の根巻き粘土帯が残っている。堅魚木は大棟の側面に取り付いているので、いわゆる置堅魚木ではなく、大棟に食い込むように深く固定された状態を示すものであろう。本体下縁には押縁が取り付いていた形跡がある。内・外面調整はヨコハケの後にナデを加える。胎土は粗砂をやや多く含み、石英、長石、角閃石が目立ち、他にチャート礫、白色パミス、凝灰岩、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好で、外面は乳白色、内面と器肉は暗灰色を呈する。

42は41と同一個体の大棟から剥離した押縁である。イ11Ｔ№14の注記がある。板造りで内側には板による叩き目が顕著に残り、表側にもこれが少し認められる。堅魚木の根元の部分が残る。輪郭



第５図　稲荷山古墳出土形象埴輪実測図１

が角張っているが、先端では丸くなるのであろう。

43は41と同一個体の大棟部である。２片が接合し、６Ｔ１区表土と６Ｔ２区北拡の注記がある。押縁が剥離し、この部分は暗灰色を呈する。成形は粘土紐巻き上げで、内外面の調整は41と共通する。

２　器財埴輪の特徴

○鞆形埴輪

44は鞆形埴輪である。稲荷山古墳の注記がある。扁球形を呈する本体部の約40％が残存している。上端には腕に装着するための２箇所の突起の基部が残る。突起間となる天井部は閉塞されていない。また、突起部の下には水平に扁平な凸帯が巡っている。側面には隅丸長方形の粘土板が貼り付けられていて、ヘラ先による線刻で格子目文が描かれている。弦の衝撃を受けるための防具と推定される。本体の下には高い円筒基部が伴っていたものと推定される。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整はタテハケ（10本／1.3㎝）、内面調整は強い横位ナデ、凸帯と防具は指ナデである。胎土には小礫と粗砂を少量含み、石英、長石、チャート礫、輝石、角閃石、白色パミスが観察される。焼成は良好にして極めて堅緻で、茶褐色を呈する。

○衣蓋形埴輪

45は衣蓋形埴輪の笠部である。３Ｔ８層の注記がある。10％の破片からの復原実測で、復原径は29.6㎝を測る。衣蓋埴輪としては小型の部類に属する。円筒部に粘土紐巻き上げにて笠部の裾を接合するものと推測される。笠部の中間位置に断面台形状の凸帯を巡らす。外面調整はタテハケ及び斜めハケ（10本／1.9㎝）、内面と端部の調整はヨコナデである。胎土には粗砂をやや多く含み、チャート礫、白色軟質粒、酸化鉄粒、輝石が観察される。焼成は良好で、淡黄褐色を呈する。

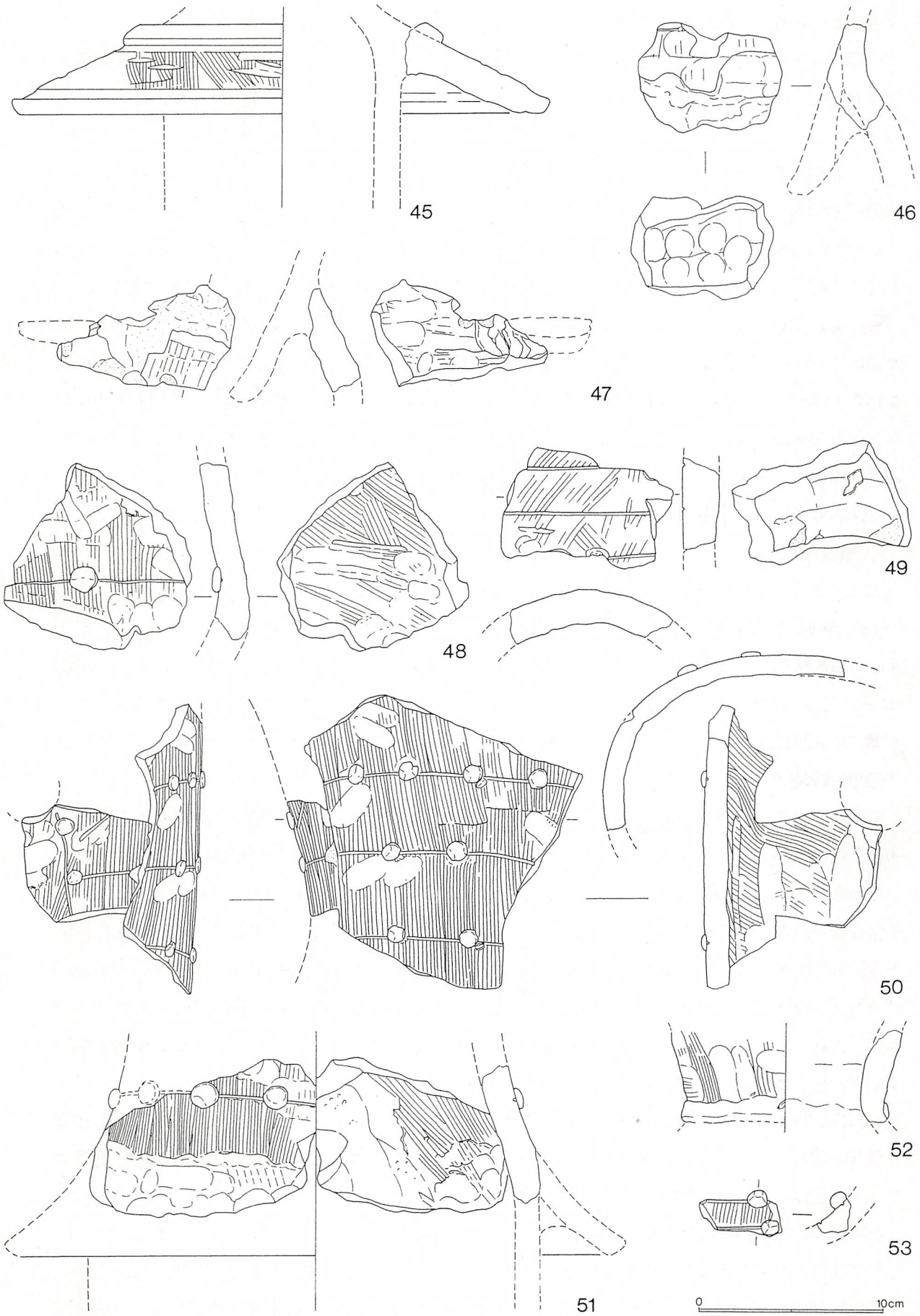
○甲冑形埴輪

55は甲冑形埴輪の頸部から冑鍔部である。内堀４Ｔの注記がある。報告書第54図２（武人）と同一個体の可能性がある。成形は頸部から冑鉢部を粘土紐巻き上げによって一体的に製作し、鍔部を貼り足している。外面には水平なヘラ描き沈線で横矧板を表現し半球形の粘土粒貼り付けによって縅紐を表現（ただし鉢部の鋲留め表現と外観は同一である）しているので、板鍔を表現したものとなろう。外面調整はタテハケ（9本／1.5㎝）後、横位ナデ、内面調整は下部では横位ナデ、上部では縦位ユビナデである。胎土はキメが細かく、細砂をごく少量含み、石英、長石、角閃石を中心に、チャート礫、白色パミス、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽく、内外面は黄色みを帯びた乳白色、器肉の分厚い部分の芯は淡青灰色を呈する。

46も55と同じ甲冑形埴輪の頸部から冑鍔部である。内堀４Ｔの注記がある。報告書第54図２と同一個体の可能性がある。成形・調整技法、胎土・焼成・色調とも55と同一である。横矧板を表現するヘラ描きの水平線が一部残る。

47も55と同じ甲冑形埴輪の頸部であるが、口の切り込みがあるので、顔面を伴っていたことがわかる。造出外堀の注記がある。報告書第54図２（武人）と同一個体の可能性がある。成形技法、胎土・焼成・色調とも55と同一であるが、内面調整はヨコハケ後横位ユビナデである。

53は55と同じ甲冑形埴輪の冑鍔部である。造出外堀の手書き注記がある。報告書第54図２（武人）



第６図　稲荷山古墳出土形象埴輪実測図２

と同一個体の可能性がある。成形・調整技法、胎土・焼成・色調とも55と同一である。わずかに外反する形状から鍔の裾付近と推定される。横矧板を表現するヘラ描きの水平線２条と縅紐を表現する粘土粒２個が残る。

52は55と同じ甲冑形埴輪の頸部である。25％の破片からの復原実測で、下部での復原径は11.4cmである。無注記である。報告書第54図２（武人）と同一個体の可能性がある。内面調整が横位ナデであるほかは成形・調整技法、胎土・焼成・色調とも55と同一である。下端は体部との接合部で屈曲しており、幅１cmの細く扁平な補強凸帯が巡る。

49は甲冑形埴輪の肩甲である。４Ｔ造出の注記がある。粘土紐を接合して断面半円形に製作し、2.8cm間隔で水平沈線を引くことによって板札の肩甲を表現するが、縅紐の表現は伴っていない。外面調整は粗い目のナナメハケ（7本／1.7cm）、内面調整は横位ユビナデである。胎土には石英、長石、角閃石を基本組成として、他にチャート礫、酸化鉄粒、凝灰岩粒が副次的に、黒色軟質粒、輝石がわずかに観察される。焼成は良好だが、表面は粉っぽい。色調は乳白色で、器肉は暗灰色を呈する。報告書第54図２（武人）とはハケ原体と焼成・色調が少し異なる。

50は甲冑形埴輪の短甲部である。引き合わせの表現がないので、背面となる可能性がある。報告書に第59図12として拓影図が掲載されているが、側面部の破片が接合したので実測して掲載することにした。それぞれ造出部４Ｔと造出の注記がある。成形は粘土紐巻き上げによるが、薄手で、器壁の厚みも均一であり、丁寧な作りといえる。側面上部には小円孔を穿っている。外面には水平なヘラ描き沈線で横矧板（現存４段分）を表現し、沈線上には直径１cm前後の半球形粘土粒を等間隔に貼り付けて、鋲留めの状態を表現している。側面には垂直な沈線が引かれており、蝶番部を表現したものであろう。したがって、本例は左胴開閉式の横矧板鋲留式短甲を模している可能性がある。外面調整はタテハケ（15本／2.4cm）、内面調整は左上がりのナナメハケ（15本／3.0cm）である。胎土は細砂をごく少量含む精選土で、石英、長石、角閃石を中心に、白色パミス、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽく、内外面は淡黄褐色、器肉は黒色を呈する。

51は甲冑形埴輪の短甲裾部である。池の注記がある。20％の破片からの復原実測で、復原最大径は24.8cmを測る。成形は粘土紐巻き上げによって円筒基部から一体的に製作した後に、外反して開く裾端部（脱落している）を貼り足していると推測される。現状では草摺部を伴っていたかどうかは不明である。外面には水平なヘラ描き沈線で横矧板を表現し、沈線上には直径1.5cm前後の半球形粘土粒を貼り付けて、鋲留めの状態を表現している。外面調整はタテハケ（21本／3.2cm）、内面調整は左上がりのナナメハケ（16本／2.7cm）の後、部分的に斜位のナデを加えている。また、裾端部の剥離面には外面調整に先行する平行叩き目とおぼしき調整痕がある。胎土は細砂をごく少量含む精選土で、石英、長石のほかチャート角礫、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成は普通で、粉っぽく、内外面は淡赤褐色、器肉は灰色を呈する。50と比較すると、器肉が厚く、鋲を表現する粘土粒が一回り大きく、焼成や色調にも差異があるので、別個体と見られる。

48は甲冑形埴輪の短甲腰部である。内堀４Ｔの注記がある。成形は粘土紐巻き上げによっており、一旦くびれてから裾が開く形状である。外面には水平なヘラ描き沈線で横矧板を表現し、沈線上には直径1.5cmの扁平な円形粘土粒を貼り付けて、鋲留めの状態を表現している。現存部には平行する

沈線がないので、横矧板の幅は6.3cmを超える幅の広いものとなる。外面調整はタテハケ（8本／1.6cm）後に部分的なユビナデを加えている。内面調整は左上がりのナナメハケ（11本／1.9cm）である。胎土は細砂をごく少量含む精選土で、石英、長石、角閃石のほか、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成はやや軟質で粉っぽく、内外面は乳白色、器肉は暗灰色を呈する。焼成・色調等の違いから50や51とは別個体で報告書第54図１または２に近い特徴を持っている。

54は甲冑形埴輪の短甲部である。外堀４Ｔの注記がある。外面には水平なヘラ描き沈線３本で横矧板（現存４段分）を表現し、沈線上には直径１cm前後の扁平な円形粘土粒（現存３個、剥離痕３箇所）を貼り付けて、鋲留めの状態を表現している。左端に垂直な沈線が引かれており、水平沈線がここでとぎれているので、引き合わせ部の表現とみられる。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整はタテハケ（10本／1.9cm）、内面調整は左上がりのナナメハケ（16本／1.8cm）である。胎土は細砂をごく少量含む精選土で、石英、長石、角閃石のほか、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成は良好だが少し粉っぽく、内外面は淡赤褐色、器肉は灰褐色を呈する。他の例と比較して横矧板の間隔が狭いことが特徴であり、焼成・色調等の違いもあるので48・50・51とは別個体となる。

３　人物埴輪の特徴

〇盾持ち人埴輪

56は盾持ち人埴輪の笄帽部分である。無注記である。粘土板を巻いて中実の太い棒とする。中央部での直径4.8cm、長さ10.4cmを測る。両端部は少し径を増し、上方へ反り返る。下面には頭頂部との接合痕が残る。その形状は環状で外径8.7cm、内径3.7cmである。このことから、頭頂部は完全には閉塞せずに、小さな孔を残した状態で、この笄部を接合していることがわかる。外面調整は長手方向への疎いタテハケ（9本／2.6cm）後、上面にはユビナデを加えている。胎土は粗砂をやや多く含み、角張った石英、長石、チャートのほか、酸化鉄粒、凝灰岩粒、片岩が観察される。焼成は普通で粉っぽく、表面は橙褐色、器肉は灰褐色を呈する。

58は角状の特異な髪型の人物埴輪頭部であり、盾持ち人である可能性が高い。側面部の２片からの復原実測である。４Ｔ造出の注記がある。粘土紐巻き上げ成形で角状部まで一連に製作する。内面には接合痕を顕著に残す。やや大ぶりで薄手の製作である。角状部は上部の開放する上すぼまりの細い円筒形で、左右２個に分かれると推定されるので、盾持ち人にしばしば見られるところの双髻に該当するものであろう。耳は環状に粘土を貼り付けた後に、外面より大きく円形に穿孔し、ユビナデを加えている。外面調整はタテハケで一部ナナメハケ（8本／1.2cm）、内面調整は下部では縦位ユビナデ、上部では横位ユビナデである。胎土は細砂を少量含み、凝灰岩粒が最も目立ち、他に石英、長石、酸化鉄粒、チャート礫が観察される。焼成は軟質で粉っぽく、外面は淡橙褐色、内面はくすんだ橙褐色、器肉は灰色を呈する。

59は盾持ち人埴輪の盾部である。内堀４Ｔの注記がある。通常の盾と区別してそう判断したのは、無文である点と内側に円筒部に取り付く凸帯の付いている点で報告書第52図2の盾持ち人埴輪と共通しているためである。現存部は正面から見て右上となる角の部分である。全体として長方形の盾となることが推定される。裏面には円筒部との接合痕が残り、タテハケ（8本／2.0cm）の雌型が顕著に残る。盾部は板造りで、平坦に製作し、内側端部を屈曲させており、断面形三角形の補強粘土を貼り

足して接合面を増やすとともに盾面を形成している。裏面の上端には前述の凸帯（断面形は方形）が付くが、円筒部へ連続して一巡していた可能性が高い。

外面調整はナナメハケ（9本／2.0㎝）で、傾斜の異なるものを交互に施すことによって装飾的効果を生んでいる。内面調整は縦位ユビナデである。側面端部はシャープなヘラ切りによる平坦面である。胎土は粗砂をやや多く含み、凝灰岩粒が最も目立ち、他に石英、長石、角閃石、チャート礫、藁状の炭化物が観察される。焼成は良好だが少し粉っぽく、内外面は橙褐色、器肉は灰黒色を呈する。

○壺を頭に載せる人物

57は壺を頭に載せる人物の壺部である。体部（b）には６Ｔ２区北拡と６Ｔ表土下部、口縁部（a）には６Ｔ１区北壁体部の注記がある。体部40％、口縁部10％の破片からの復原実測である。体部復原径は11.4㎝、口縁部復原径は14,4㎝である。壺の体部は扁球形で算盤玉形に近い。口縁部は大きく外反して開き、坩形の器形を呈する。成形は粘土紐巻き上げで、外面調整は体部下半ではナナメハケ（8本／1.3㎝）、上半ではタテハケ後、横位ナデ、口縁部ではナナメハケ後、ヨコナデ、内面調整は体部下半では強い縦位ユビナデ、上半では横位ユビナデ、口縁部ではナナメハケである。現存部下端に剥離痕があり、頭部との接合部と推定できる。外面体部上半から口縁部には赤彩が施されている。胎土は細砂をごく少量含む精選土で、石英、長石を主体とし、他に角閃石、酸化鉄粒、凝灰岩礫、片岩が観察される。内外面は淡褐色、器肉は灰黒色を呈する。

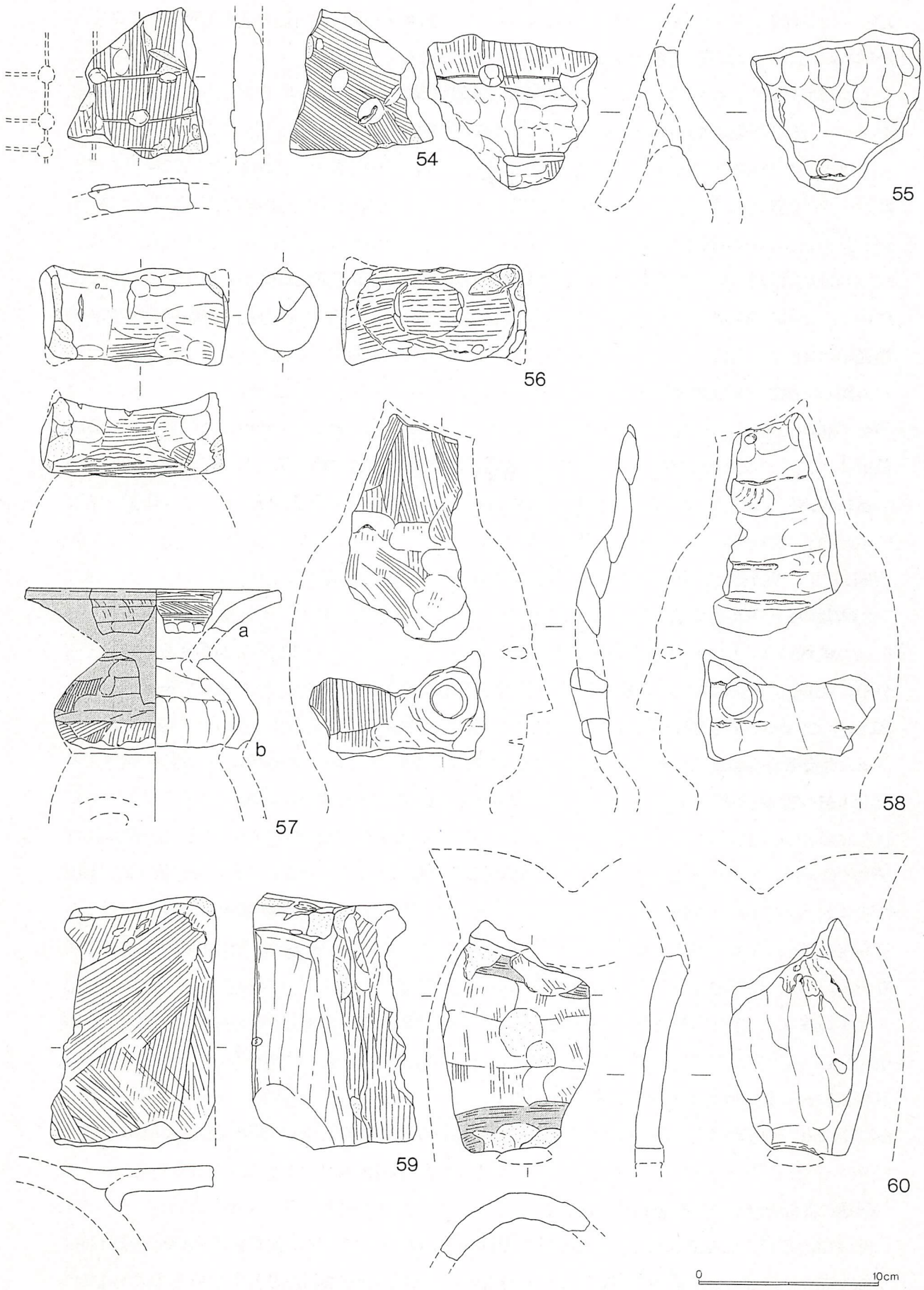
○幘状の被り物を付ける人物

60は幘状の被り物を付ける人物頭部で、おそらく男子となろう。右額部から右目上縁が残存している。池の注記がある。粘土紐巻き上げ成形で被り物までを一体的に製作している。被り物は現存部上端の様子からみて、上部で屈曲し、大きく開きながら立ち上がる形状が推測される。先端は二叉またはそれ以上分かれていた可能性が高い。また、額に相当する部分が通常よりも長いので、この部分も被り物の一部となるが、沈線などによる下縁部の表現は行われていない。

目は外面からヘラ先で切り取られている。眉は貼り付けたものではなく、その上縁と下縁をユビナデでくぼめることによって、相対的に高まりを表現したもののようである。この眉の位置と被り物の屈曲部に水平方向の赤彩がささら状の筆を用いて施されている。眉の位置の赤彩はあるいは被り物の下縁を表現したものであるかもしれない。外面調整はタテハケ（5本／0.9㎝）後、横位ナデ、内面調整は縦位ユビナデである。胎土は細砂をごく少量含む精選土で、凝灰岩粒が目立つほか、石英、長石、チャート、角閃石が観察される。焼成は普通で、外面は白っぽい淡褐色、内面は淡褐色、器肉は暗灰色を呈する。

○烏帽子状の被り物を付ける男子

61は烏帽子状の被り物を付ける男子頭部で、顔面から被り物の先端までが残存しているが、顎と右頬から後頭部を失っている。造出の注記がある。顔面の復原幅は14.4㎝、顎から被り物先端までの複元長は20.0㎝である。成形は粘土紐巻き上げで被り物までを一体的に製作する。顔面はいわゆる丸顔で、顎が短いことを特徴としている。鼻は粘土塊を貼り付けて、幅が狭く、鼻梁の長い低い鼻を表現している。また、外面から細い円棒を貫通させることによって鼻孔を表現している。口と目は外面からヘラ先によって切り抜かれている。目は目頭が丸く、目尻がやや細くなる形状で、やや伏し目



第７図　稲荷山古墳出土形象埴輪実測図３

がちである。眉は薄い粘土紐を貼り付けてからユビナデ調整を加えており、わずかな高まりがある。左こめかみ部には美豆良の根元が残存するが、本体は剥落している。

被り物は先端の尖る烏帽子状のもので、頂部で前後方向の稜をなしているので袋烏帽子と同じ形状である。眉の上部には被り物の下縁を表現した細い沈線が引かれている。

外面調整はタテハケ（10本／1.7㎝）主体で、額部のみヨコハケを施し、後に顔面では横位ナデを加えて、ハケ目を摺り消している。内面調整は中・下位では縦位ユビナデであるが、上位では粘土紐痕を残し、ユビ押さえ痕が多数認められる。最終的には器壁を絞り込みながら閉塞を行っている。胎土は細砂をごく少量含む精選土で、凝灰岩粒が目立つほか、石英、酸化鉄粒（径5㎜の大粒を含む）、チャート、角閃石が観察される。焼成は良好で、外面は黄色みを帯びた乳白色、内面は淡褐色、器肉は暗灰色を呈する。

○顎に赤彩のある坊主頭の男子

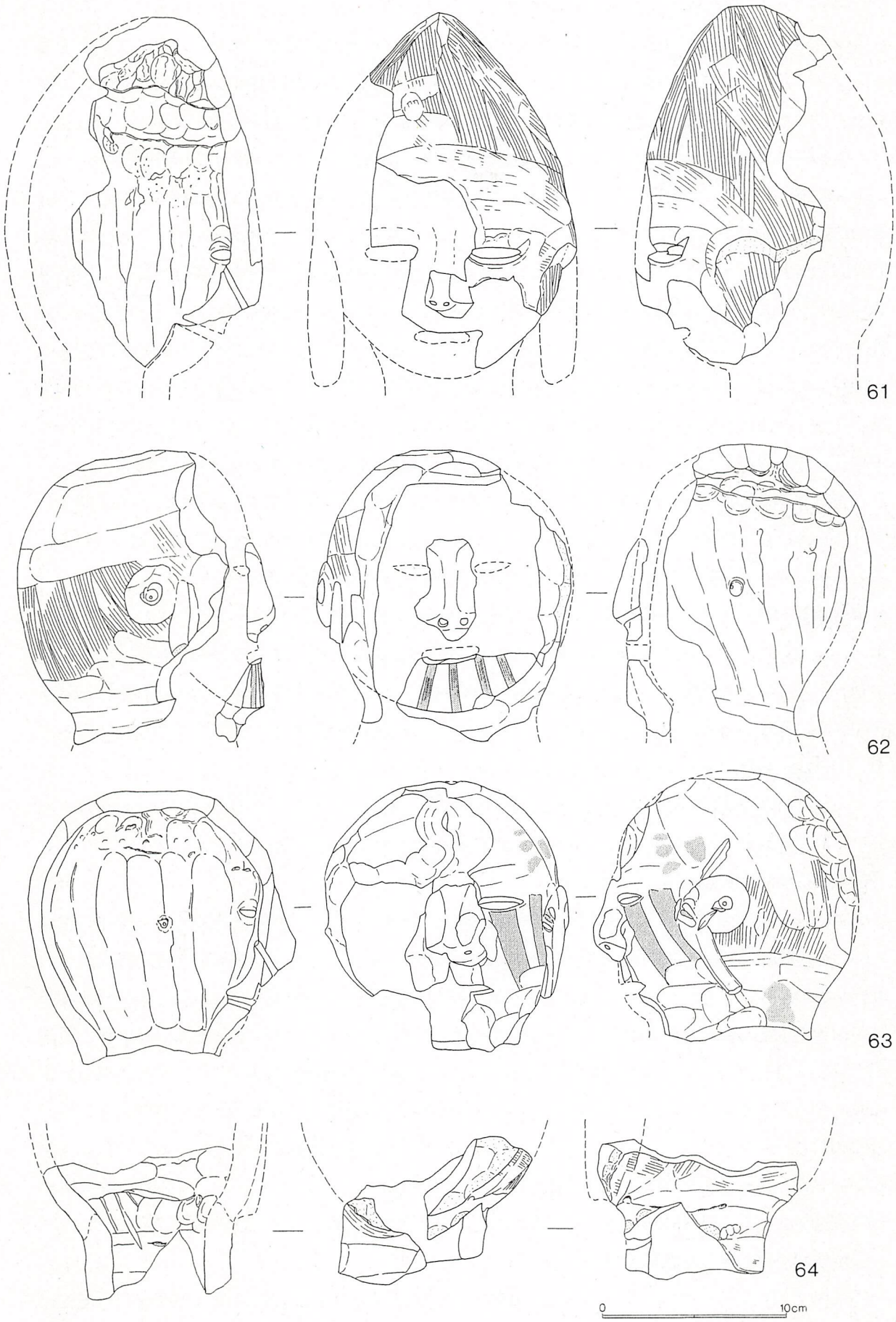
62は顎に赤彩のある坊主頭の男子頭部で、首から上部のうち、鼻を除く顔面を失っている。造出部外堀、造出、№6の3種類の注記がある。また、鼻には4Ｔ造出外堀№7の注記がある。顔の幅は14.0㎝、長さは14.3㎝で、ほぼ真円形の丸顔に作られている。粘土紐巻き上げによって球形に成形し、頭頂部は弾丸形の小さな粘土塊で塞いでいる。

顎は粘土を貼り足し、ヨコナデを加えて調整することによって、輪郭を作りだしている。また顎には直線状の赤彩帯が等間隔に4本残存しており、口の付近から顎に向かって放射状に配置されている。なお、赤彩にはささら状の刷毛が用いられ、そのハケ目が付いている。鼻は顔面から剥離している。幅が狭く、鼻梁の長い低い鼻であり、外面から細い円棒を貫通させることによって鼻孔を表現している。これらの諸特徴は前述の61と共通している。口と目は外面からヘラ先によって切り抜かれている。目は目頭の部分しか残存していないが、目頭が尖っており、細くて小さい目になる可能性が考えられる。口は幅が狭く水平で、わずかに開口気味と推測される。耳は右耳のみが残存している。平面形は数字の9に似ていて、環状部とこれに接して貼り付けられた棒状部からなっている。棒状部は耳の形状を示すものとは考えにくいので、紐状の耳飾りを表現したものかもしれない。耳はいったん竹管のようなもので、外部から貫通させて予定箇所をマークしてから、円盤状の粘土を貼り付けて、その中心部を外部から細いヘラ状の工具を用いて丸く切り抜くが、貫通はしていない。美豆良の表現はなく、上部の頭髪表現も全く行われていないので、坊主頭と見てよい。

外面調整はタテハケ（11本／1.7㎝）後に耳より上の頭部と顎には横位ナデを加えて、ハケ目を摺り消している。内面調整は強い斜位ユビナデであるが、頭頂部には粘土紐痕を残し、ユビ押さえ痕が多数認められる。胎土は細砂を少量含み、石英、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒、チャート、角閃石が観察される。焼成はやや軟質で粉っぽく、内外面は白っぽい淡褐色、器肉は暗灰色ないし黒色を呈する。

○頬に赤彩のある坊主頭の男子

63は顎に赤彩のある坊主頭の男子頭部で、首から上部のうち、右目から下の頬の部分と頭頂部の一部を失っている。４Ｔ造出外堀№9の注記がある。報告書に第53図4として実測図が掲げられている人物埴輪である。顔の幅は14.0㎝、長さは13.6㎝で、ほぼ真円形の丸顔に作られている。粘土紐巻



第８図　稲荷山古墳出土形象埴輪実測図４

き上げによって球形に成形し、顎への粘土の貼り足しは行っていない。

鼻は幅が狭く、鼻梁の長い低い鼻であり、外面から細い円棒を貫通させることによって鼻孔を表現している。これらの諸特徴は前述の61・62と共通している。口と目は外面から鋭利な刃物で一気に切り抜かれている。おそらく金属製の刀子であったであろう。目は笹葉形で小さく細い。眉は極めてわずかな高まりとして表現されており、粘土を貼ったのか周囲をなでくぼめたのか判断が付かない。口は幅が狭く水平で、端部が尖り、わずかに開口気味である。耳は左耳のみが残存している。平面形は数字の９の裏文字に似ていて、環状部とこれに接して貼り付けられた棒状部からなっている。棒状部は根元はユビ押さえによってつぶれているが、途中から幅を減じるとともに高さを増し、断面形は方形を呈する。少し後方へ反りながら下方へ伸びているが、５cmが現存し、さらに２cmほど伸びる形跡があるので、耳朶の表現とはなしえず、美豆良とも表現が異なるため、耳孔前方の突起部に穴を開けて取り付けられた紐状の耳飾りの表現とするのが妥当と考える。耳は円盤状の粘土を貼り付けて、その中心部を外部から棒状の工具で刺突貫通させてから、こじながら上広がりの丸いくぼみを作っている。美豆良の表現はなく、上部の頭髪表現も全く行われていないので、坊主頭と見てよい。

左頬には直線状の赤彩帯が間隔を空けて２本引かれている。１本は目の下から斜め下方に開き、もう１本も、この外側に平行して引かれている。幅は上端が最大で下方へ向かって幅を減じている。このほか、左前頭部と左頸部にも赤彩が残るが、文様としての把握はできない。

外面調整はタテハケ（7本／1.0cm）後に後頭部下位を除く全体に丁寧なナデを加えて、ハケ目を摺り消している。ナデの方向は頭頂部では斜位、頸部と顔面では横位である。内面調整は強い縦位ユビナデであるが、頭頂部には粘土紐痕と絞り目を残し、ユビ押さえ痕が認められる。胎土は細砂を少量含み、石英、凝灰岩粒、酸化鉄粒、チャート、角閃石が観察される。焼成はやや軟質で粉っぽく、内外面、器肉ともには肌色に近い淡赤褐色を呈する。

なお、報告書掲載の実測図は欠損部を復原的に書き込んだものであり、顔面全体に赤彩が施されていたとする推定も事実誤認であるため、今回の資料報告をもって訂正しておきたい。

○顎に広く粘土を貼り足す人物頭部

64は人物頭部で、頸部のほか左顎から左側頭部下位が残存している。無注記である。頸部の直径は8.0cm、顔幅の復原値は13.6cmである。粘土紐巻き上げによって頸部から頭部を一体的に成形し、頭部を球形に製作する点では62や63と共通する。顎には広く粘土を貼り足して、こめかみ付近までの顎の稜線を表現している。側頭部には美豆良の表現がないので、女子となる可能性が高いが、坊主頭や笄帽を被る盾持ち人となる可能性も残されている。頭部の外面調整はヨコハケ（5本／0.6cm）後に横位のナデを加えて、ハケ目を摺り消している。頸部の外面調整は２指を当てての横ナデである。内面調整は横位ユビナデであるが、一部に木口状工具による横位調整が加えられている。胎土は粗砂をやや多く含み、凝灰岩粒と大粒の酸化鉄粒が目立つほか、石英、チャート、角閃石、藁状炭化物痕が観察される。焼成は良好にして堅緻である。内外面は橙褐色、器肉は暗茶褐色を呈する。

○後頭部が残る推定坊主頭の男子

65は後頭部が残る坊主頭の男子頭部で、顔面と頭頂部を失っている。造出部４Ｔの注記がある。顔の幅は13.0cm、復原長は13.3cmで、ほぼ真球形に作られている。粘土紐巻き上げによって頸部から

頭部を一体的に成形している。耳は右耳のみが残存している。環状部とこれに接して貼り付けられた棒状部からなっているが、棒状部は根元の痕跡をわずかに残すのみで、剥離している。耳は粘土紐の端部を閉じることによって環形をなす。中心部を外部から棒状の工具で刺突貫通させてから、こじながら上広がりの丸いくぼみを作っている。美豆良の取り付くべき部分は失われていて、その有無は不明と言わざる得ないが、髷が取り付く形跡は認められず、上部の頭髪や後頭部の垂髪の表現が全く行われていないので、坊主頭となる可能性が高い。外面調整はタテハケ（6本／1.0cm）後に横位ナデを加える。内面調整は強い斜位ユビナデであるが、頭頂部付近には絞り目を残す。胎土は細砂をやや多く含み、大粒の凝灰岩粒が目立つほか、石英、、酸化鉄粒、チャート、長石、角閃石が観察される。焼成はやや軟質で粉っぽく、内外面、器肉ともに淡橙褐色を呈する。

○細く長い首の人物

66は細く長い首の人物で、頸部が完存するほか口を含む顎部が残る。造出部外堀の注記がある。頸部の直径は5.9cm、長さは5.0cmを測る。他の人物埴輪に比較して、頸部が細く長いことが特徴であり、頭部径9cm代の小型品になることが推定される。

円筒状の頸部には粘土紐痕が全く認められないので、粘土板を丸めて両端を閉じていっぺんに製作した可能性が高い。工程としては体部製作の最終段階に首を取り付けるべき孔を残して、その孔の周縁部の粘土を少し引き出しておき、これに円筒状の頸部を継ぎ、次に、内傾する頸部上端面を接合面にして粘土紐巻き上げを行って頭部を成形したとみられよう。頸部と頭部の接合部内面には段を伴う明瞭な接合痕がある。また、顎には粘土を貼り足しておらず、口が低い位置に穿たれているので、いわゆる顎無しの面相となろう。これらの諸特徴は報告書第53図2の男子頭部（側頭部から後頭部を防御する錏の付く冑で、鋲や縅紐の表現がないので、おそらく皮革製のものを付けている）とことごとく共通しており、同工品であった可能性が高い。口は下辺の内側部分のみが残存している。外面からヘラ状の工具で刺突穿孔したものである。幅は2.1cmを測り、ほぼ平坦である。

外面調整はタテハケの後に縦位のナデを加えてハケ目を撫で消している。また、頭部と体部にそれぞれ接する上位と下位には横位のユビナデが加えられている。内面調整は縦位後に横位のナデで、体部との接合部にはしぼり痕が残る。胎土は礫と粗細をやや多く含み、大粒の凝灰岩粒が目立つほか、チャート（最大のものは直径14mmの亜角礫）、石英、酸化鉄粒、長石、角閃石が観察される。焼成は良好だが、表面のみやや軟質で粉っぽく、内外面は橙褐色、器肉は灰褐色を呈する。

○顔面を赤く彩色する人物

67は顔面を赤く彩色する人物で、頬と耳の一部を含む右側頭部から後頭部に欠けた部分が現存している。イ５Ｔ２区表土の注記がある。粘土紐巻き上げによって、頸部で一旦くびれた後に、球形に頭部を成形している。耳は円盤状の粘土塊を貼り付けてから、その中心部に外側から丸い棒を差し込んで、穿孔し、こじりながら孔の径を増している。奥にはその際に出た粘土滓が残っている。顔面には鮮やかな暗赤色の顔料が塗布されており、一部はがれているが、面的な広がりがあり、顔面の全体か頬の全面に施されていたものであろう。首筋にも赤彩が部分的に残っており、もとは首にも面的に施されていた可能性がある。

外面調整はナナメハケ（7本／1.3cm）の後に、首筋は粗い布を用いた横位のナデ、顔面は丁寧なナ

デを加えてハケ目を撫で消している。内面調整は下位では幅の狭い木口状工具による斜位調整、上位では斜位のユビナデである。胎土は細砂を少量含み、石英、長石、角閃石、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成は普通だが、表面のみやや粉っぽく、内外面は淡褐色、器肉は茶褐色を呈する。胎土・焼成・色調は95の意須比を付けた巫女と共通しており、同一個体の可能性がある。

○鼻孔表現のない鼻

68は顔面から剥離した人物埴輪の鼻である。造出の注記がある。粘土塊を指先で成形して、そのまま顔面に圧着したものである。幅が狭く、鼻筋の長い低い鼻である。鼻孔の表現は伴っていない。外面調整はユビナデである。胎土は細砂と礫を少量含み、凝灰岩粒が目立つほか、石英、チャート礫、酸化鉄粒、藁状炭化物が観察される。焼成はやや軟質で表面が剥落していて、粉っぽい。外面は淡橙褐色、剥離面は灰色を呈する。

○赤彩された鼻

69は鼻と口の一部を含む顔面中心部の破片である。内堀４Ｔの注記がある。外面には全体的にくすんだ暗赤色の彩色が施されているが、剥離してしまった部分もある。鼻は低くて短い鼻で、わずかな稜線があって、三角錐状を呈する。外面から円棒を刺突穿孔して、平面形円形の鼻孔を表現するが、左鼻孔は浅くて貫通していない。口は上辺が残存している。外面から鋭利な刃物で切り抜いている。外面調整はユビナデである。胎土は粗砂を少量含み、凝灰岩粒、、石英、酸化鉄粒、角閃石が観察される。焼成は軟質で粉っぽい。内外面、器肉とも淡橙褐色を呈する。

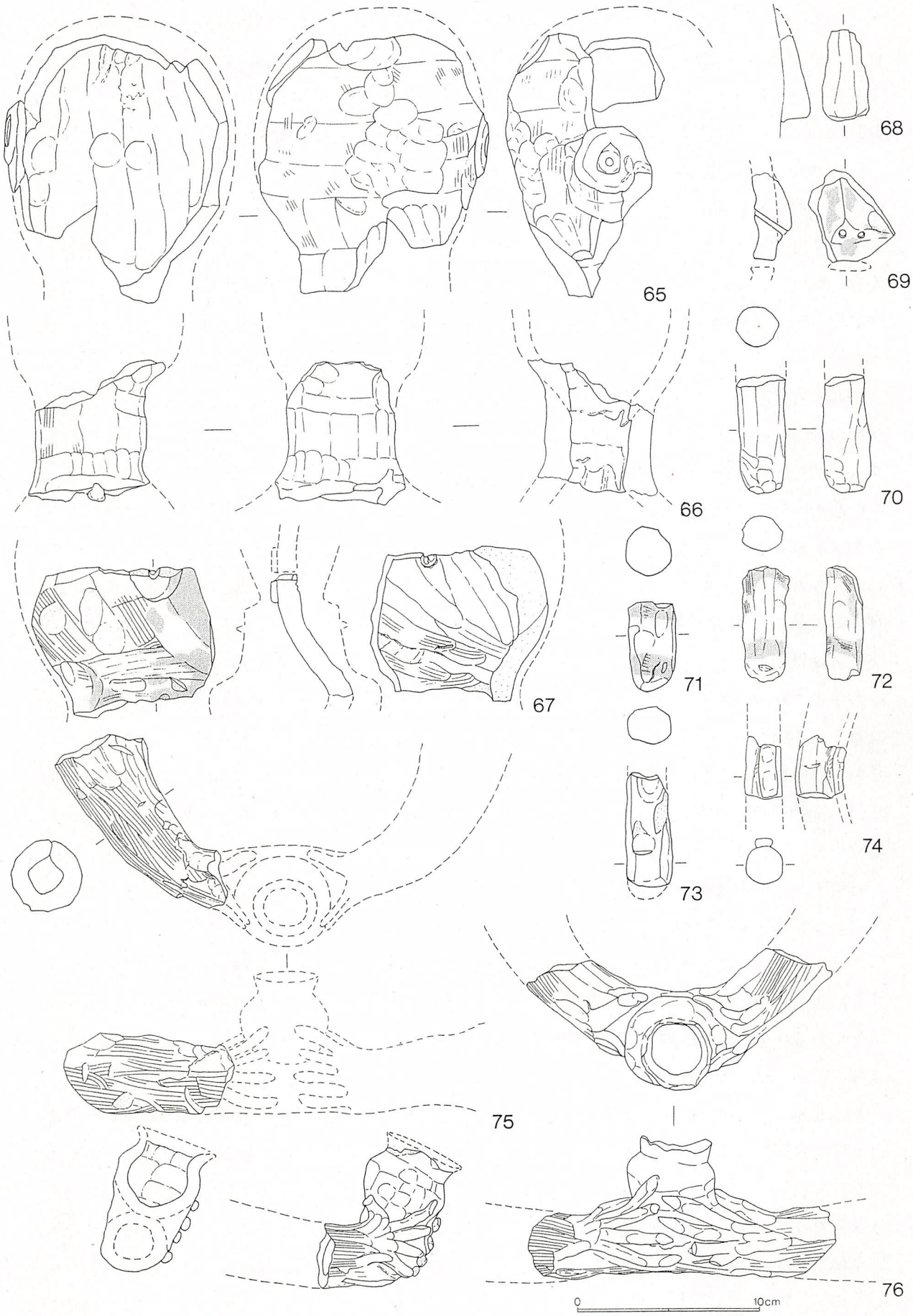
○美豆良

70は断面が円形を呈する棒状の美豆良である。稲荷山池西側周堀の注記がある。根元の部分を失っている。直径2.5㎝、残存長6.5㎝を測る。粘土を転がして成形したもので、端部は丸く収めている。外面調整は縦位のユビナデである。胎土は細砂と礫をごく少量含み、チャート礫、凝灰岩粒、酸化鉄粒、角閃石が観察される。焼成は良好にして堅緻で比重がある。外面、器肉とも暗茶褐色を呈する。

71は断面が円形を呈する棒状の美豆良である。造出の注記がある。根元から中間部を失っている。直径2.7㎝、残存長4.9㎝を測る。粘土を転がして成形したもので、端部は丸く収めている。だいぶ薄れてはいるが、赤彩帯を２段巡らし、その塗布に用いたハケ目も残る。外面調整は縦位のユビナデである。胎土は細砂をごく少量含み、チャート、凝灰岩粒、石英が観察される。焼成は普通で少し粉っぽく、多孔質で比重がやや軽い。外面は淡黄褐色、器肉は暗灰色を呈する。

72は断面が円形を呈する棒状の美豆良である。注記は不明瞭で稲荷山のみ読みとることができる。根元を失っているが、上端が拡がり始めており、根元付近と見られる。直径2.4㎝、残存長6.3㎝を測る。粘土を転がして成形したもので、端部は丸く収めている。赤彩帯を２段巡らし、その塗布に用いたハケ目も残る。塗り方は雑で、歪んでいる。外面調整はタテハケ（7本／0.9㎝）の後に、縦位のユビナデを加える。胎土は細砂をごく少量含む精選土で、チャート、凝灰岩粒、石英、角閃石、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通で少し粉っぽく、多孔質で比重がやや軽い。外面は灰黄がかった乳白色、器肉は黒色を呈する。

73は断面が円形を呈する棒状の美豆良である。無注記である。根元と先端を失っているが、上端



第９図　稲荷山古墳出土形象埴輪実測図５

はやや薄くなっており、根元に近く、下端も収束し始めているので先端に近いと見られる。直径2.5㎝、残存長6.1㎝を測る。粘土を転がして成形したもので、端部は丸く収めているらしい。表面には発掘時に付いた傷がある。外面調整は縦位のユビナデである。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、凝灰岩粒、石英、角閃石、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通で少し粉っぽく、多孔質で比重が軽い。外面は明るい橙褐色、器肉は暗灰褐色を呈する。

○人物埴輪から離脱した弓

74は人物埴輪から離脱した弓である。稲荷山池の注記がある。粘土を転がし断面形円形に成形した粘土棒を弓本体部とし、これに粘土紐を貼り付けて弓弦を表現する。本体部の直径は2.0㎝、弓弦の幅は0.9㎝を測る。全体が弓弦側に湾曲している。現存長は3.5㎝あるが、弭部分は含まれず、両端が欠けているので、中間の部分となる。弓は外面ハケ調整後、ユビナデ、弓弦は粘土紐を転がして成形後、指頭押圧によって貼り付けている。胎土は粗砂を少量含み、チャート、凝灰岩粒、石英、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通で少し粉っぽく、多孔質で比重がやや軽い。外面は明るい橙褐色、器肉は暗茶褐色を呈する。

○小壺を捧げ持つ巫女の腕１

75は完存する76と形状、製作技法が共通することをもって小壺を捧げ持つ巫女の腕とみて誤りないであろう。無注記である。根元の方は太く、手首に向かって細く作られており、全体が内側に湾曲する。手首の上部には粘土紐を貼り付けて表現した拇指の根元が残っているので、右腕となる。製作技法は根元側をやや厚く、手首側を薄くした平面形台形の粘土板を丸め、両側端部をとじ合わせて中空の腕としている。手首の所にみられる段（上下両面にハケ調整がある）は、このようにして製作した２本の腕を連結するために粘土帯でくるんで仕上げてあったのが剥離したものである。

外面調整は長手方向のハケ（6本／1.4㎝）後に、内側部分にのみ長手方向のユビナデを加えている。内面調整は粘土板の段階で長手方向のハケを施している。胎土は細砂を少量含み、凝灰岩粒が目立つほか、石英、酸化鉄粒、チャート、角閃石、藁状炭化物が観察される。焼成は良好で、内外面は橙褐色、器肉は暗茶褐色を呈する。

○小壺を捧げ持つ巫女の腕２

76は小壺を捧げ持つ巫女の腕で、壺と両手首付近が残存するが、根元の部分は失っている。４トレ北拡池内Ｓ48.12.25のラベルを伴っている。腕の太さは3.6㎝前後で、左右の腕を一連に作っており、平面でみると壺を中心として左右対称形で、全体が内側に湾曲しているので、両手で壺を捧げ持つ状態を表現したものと見てよい。

製作手法は、厚さ8㎜ほどの粘土板を丸め、両側端を綴じ合わせて中空の腕を成形するもので、孔は全体を貫通している。内面観察から、左右別々に製作した腕を継ぎ手を用いて一体化していることがわかる。一連にした両腕のちょうど中間部となる上面には、小型壺を接合し、安定させるために補強用粘土を充填し、さらに粘土紐を貼り付けて左右の指10本を表現している。それは両手で壺の下半部から底部を包み込むように持つ状況を再現している。また、腕の下面は一体的な平坦面をなしており、製作台の痕跡と見られるので、製作台の上で腕を一体化させ、一度に体部に接合したことが推定できる。壺は体部が球形、口縁部は短く直立気味の器形をなし、粘土紐巻き上げで成形し

たのち、内外面をユビナデ調整している。独立して製作されたもので底部も伴っており、製作は丁寧である。胴部最大径、器高とも4.5㎝、器壁の厚さ0.7㎝を測る。

腕の外面調整は長手方向のハケ（7本／1.0㎝）後に、内側部分にのみ長手方向のユビナデを加えている。内面調整は長手方向のユビナデを丸める前（粘土板の段階）に施し、綴じ目を指の側面で押さえるようにして調整している。胎土は粗砂を多量に含み、凝灰岩粒が目立つほか、石英、酸化鉄粒、チャート、角閃石、長石、片岩が観察される。焼成は普通で、表面が少し剥落している。内外面は橙褐色、器肉は暗オリーブ褐色を呈する。75と製作手法・形状・胎土への含有鉱物・色調が近似している。

○小壺を捧げ持つ巫女の腕３とその胴部

77は人物埴輪の右腕で、手の形状と掌内側の剥離痕から小壺を捧げ持つ巫女の腕と推定される。指先及び体部との接合部を失っている。西造出外堀の注記がある。腕は上面から見ると大きく内側に湾曲している。断面形はＤ字形を呈し、内側が直線的で外側は丸みを帯びている。根元側の上下幅は7.5㎝、手首では3.6㎝で、手首に向かって幅を減じている。製作技法は、３本の細長い粘土紐を合わせて、１枚の粘土板とし、その両側端を綴じ合わせて中空の腕とするもので、綴じ目は上側にあることが内面観察によって確認できる。

掌は手首端部に粘土を貼り付けて成形している。拇指は独立して立っているが先端を失っている。また、他の４指は欠失している。掌の内側は丸くくぼんでおり、剥離痕が認められるので、壺の体部が接合していたものと推測される。やや大型の壺を介在させて、両手で壺を捧げ持つ左右対称形の腕の復原図を掲げておいた。手首には赤彩帯が一巡するが、かなり薄れている。

腕の外面調整は長手方向のハケ後に、丁寧なナデを加えて、ハケ目を擦り消している。内面調整は長手方向のユビナデを、丸める前（粘土板の段階）に施すが、丸めた際の絞り目が縦方向に生じている。胎土は細砂を少量含み、石英、酸化鉄粒、チャート、凝灰岩粒、長石、片岩が観察される。焼成は普通だが、少し粉っぽく、断面観察では多孔質である。外面は淡褐色、器肉と内面は暗灰色を呈する。分厚い作りのため重量感がある。

81の胴部は胎土・焼成・色調（少し茶色味がかった特徴的な淡褐色）の一致から77と同一個体と特定できる。４Ｔ造出の注記がある。腰部から胴部にかけて残存しており、外反しながら開く下端部の形状から半身像と推定される。外面下位には水平に貼られた帯の剥離痕があり、その推定幅は4.5㎝である。帯の直上での胴部復原幅は14.5㎝である。成形は粘土紐巻き上げによっている。

外面調整はタテハケ後にヨコハケ（5本／1.5㎝）を施し、さらに斜位のナデを加えて、ハケ目をほぼ完全に撫で消している。剥離した帯の上縁部は現存しており、帯の上側面に対するヨコナデ調整痕がある。内面調整は裾部では横位、腰から上部では斜位の強いユビナデである。胎土は細砂を少量含み、石英、酸化鉄粒、チャート、凝灰岩粒、長石が観察される。焼成は普通だが、少し粉っぽく、断面観察では多孔質である。外面は淡褐色、内面は黄白色、器肉は暗灰色を呈する。

78の左肩部も胎土・焼成・色調の一致から77と同一個体と特定できる。４Ｔ造出の注記がある。前方に向かう左腕の付け根部分が少し残存しており、腕を前方に突き出していることがわかる。肩と腕は一連に作られているように見えるが、図示していない左肩部後ろ側の破片（内堀４Ｔの注記あ

り）では、腕の接合予定箇所の端部を薄く引き出し、その外側に補強用の粘土を貼り足しているので、腕を肩部に外被せする取り付け方法の採用されていることがわかる。

外面調整は体部ではヨコハケ（4本／0.8㎝）、腕の付け根付近ではタテハケを施した後に、ナデを加えて、ハケ目をほぼ完全に撫で消している。内面調整は横位の強いユビナデである。

なお、他に同一個体の小破片５点があり、胴部片（造出部４Ｔの注記あり）と推定される。

○腰にあてがう中実の両腕

79と80は胎土・焼成・色調が一致し、同一個体の両腕となる。このうち79は右腕で、掌の内側に体部との接合痕があり、腕が長く、湾曲する形状からみて、腰に手を当てる姿態をとっていたことがわかる。外堀４Ｔの注記がある。製作技法は扁平な粘土板を丸めて中実の腕を成形するもので、太さはほぼ一定している。直径は3.3㎝を測り、中空の腕に比して細い。掌の部分は腕の先端部を平たくのばして成形しており、拇指は独立して前方に向くが、他の４指は揃えて下を向く。その先端部は失っていて、指の表現を行っていたかどうかはわからない。掌の内側には平らにのばしたときに付いた作業台の木目圧痕がある。また、腰の部分に密着させるために補強用の粘土を周縁部に貼り足しており、これには体部側に施されていたタテハケ（6本／1.4㎝）の雌型が残っている。腕の外面調整は主に長手方向に施すハケ（5本／0.7㎝）の後、ナデを加えている。内面調整は横位の強いユビナデである。

80は左腕で、根元の臍先端部と掌の大半を失っている。内堀４Ｔの注記がある。緩やかに内側に湾曲しており、残存長は19.3㎝を測る。根元の部分は太く、前後幅は6.2㎝、手首の部分に向かってその幅を減じ、3.0㎝を測る。製作技法は、粘土板を「の」字状に巻いて中実の腕とするもので、根元を臍のように肩部の孔に挿入し、補強用の粘土を貼り足して固定したことがわかる。掌は79と同様に外側に反り返っているので、右腕と同様に腰にあてがわれていたと推定される。また、拇指は粘土紐貼り付けによって、独立した造形が行われている。

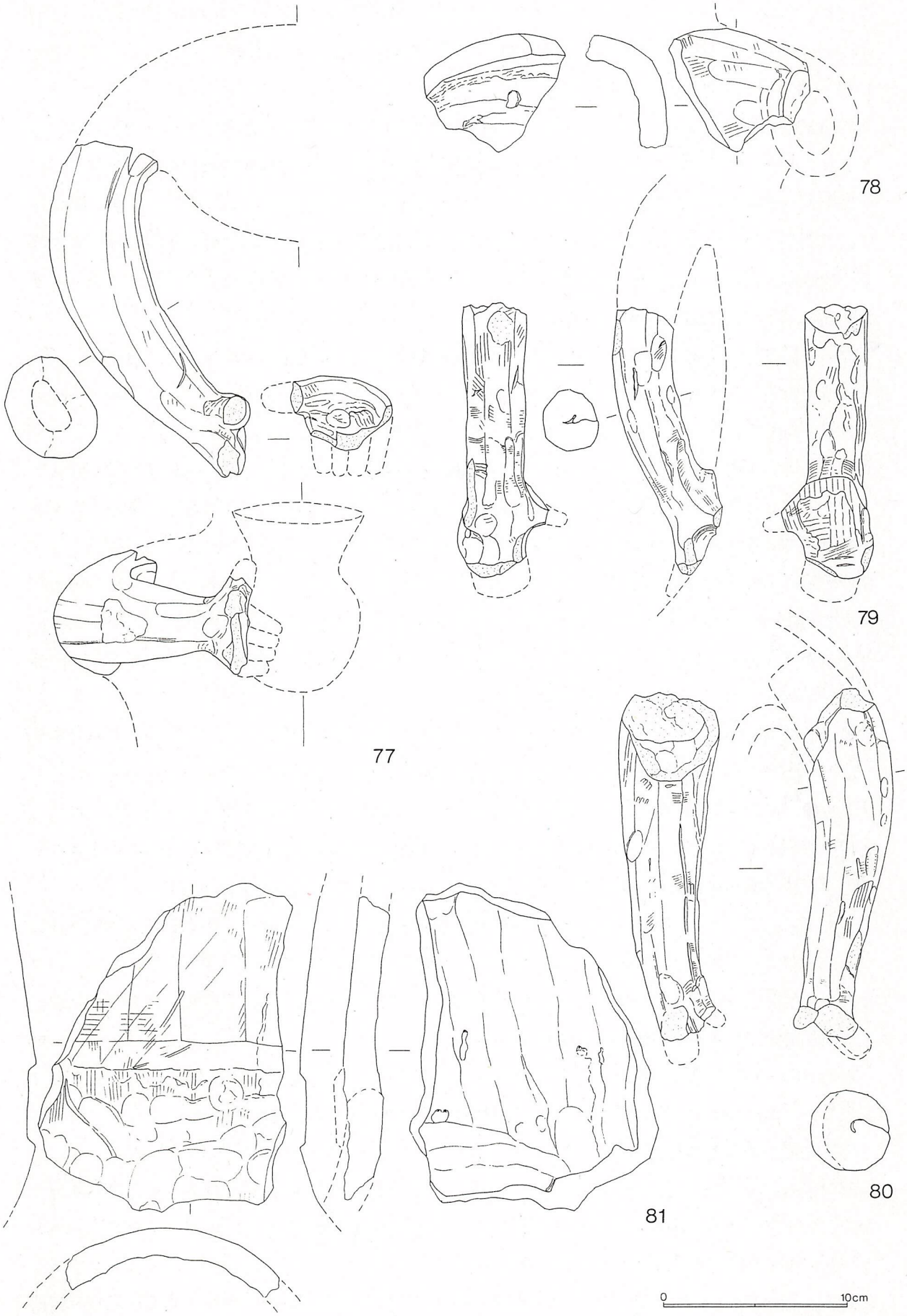
外面調整は長手方向のハケ（3本／0.4㎝）の後、ナデを加えて、ハケ目をほとんど擦り消している。79と80の胎土は小礫と細砂をやや多く含み、石英、長石、角閃石、酸化鉄粒、チャート、凝灰岩粒、鉄石英、火山ガラス、輝石、片岩のほか、細かい海面骨針数点が観察される。焼成は良好にして、極めて堅緻で、外面は茶褐色、器肉は暗茶褐色を呈する。

○大帯を締める大型人物

82・83・85・86は同一個体の各部位である。頭部を含まないが、大型の人物像であり、大帯を締めているので、男子像となろう。

82は右肩から腕にかけた部分である。腕は右斜め前方に60度ほど開き、水平に付けられている。腕の中間から掌の部分は失っている。造出部４Ｔの注記がある。製作技法は、３枚の細長い粘土紐（内面にわずかな段が生じているので明瞭にわかる）を合わせて、１枚の粘土板とし、その両側端を綴じ合わせ、絞り込んで成形し、中空の腕とするもので、綴じ目は下側にあることが内面観察によって確認できる。

肩部との接合方法は、肩の孔の周縁部を薄く摘み出し、その外側に腕の根本を被せ、さらに接合部外面に薄く補強用粘土を貼り足すものである。その処理方法は熟練しており、厚みもほとんど変



第10図　稲荷山古墳出土形象埴輪実測図６

化していないので、ちょっと見ただけでは体部と腕が一連に製作されているかのように見える。体部は粘土紐巻き上げによりながらも、非常に薄手に製作されていることに特徴があり、薄いところでは0.7㎝、厚いところでも1.0㎝程度である。

外面調整は体部ではナナメハケ（7本／1.5㎝）、腕では長手方向のユビナデである。内面調整は体部ではナナメハケ（6本／1.3㎝）及びユビナデで、腕の接合部には強い指頭圧痕が多数みられる。胎土は小礫と細砂をやや多く含み、石英、チャート、凝灰岩粒を基本組成とし、他に、長石、酸化鉄粒、鉄石英、火山ガラス、輝石、片岩のほか、わずか１点だけ細かい海面骨針の先端部が観察される。焼成は良好にして、極めて堅緻で、たたくと金属質の音がする。内外面は橙褐色（濃淡のムラがある）、器肉は茶褐色を呈する。

83は左肩部で、内面観察によって、中空の腕を接合するために先端部を絞って薄く摘み出している様子がわかる。無注記である。外面調整は横位ナデ、内面調整は細かいヨコハケ（10本／1.2㎝）である。外面は還元がかって、灰白色を呈する。

85は腹部正面から左脇にかけた破片である。側面では腰が少しくびれ、裾に向かって開く形状を示している。無注記である。外面向かって右端には縦方向に粘土紐を貼った剥離痕があり、ユビナデを伴っている。盤領衣の前身頃の衽を表現したものかもしれない。また、その左側にも幅4.2㎝、長さ6.5㎝の楕円形の剥離痕がある。ここに何が付けられていたのかは不明であるが、左腕の先端部付近であった可能性も考えられる。成形は粘土紐巻き上げにより、接合痕を内面にわずかに残す。外面調整はタテハケ（9本／2.2㎝）、内面調整は右上がりのナナメハケ（21本／4.4㎝）である。内面は還元がかっており、オリーブ灰色を呈する。

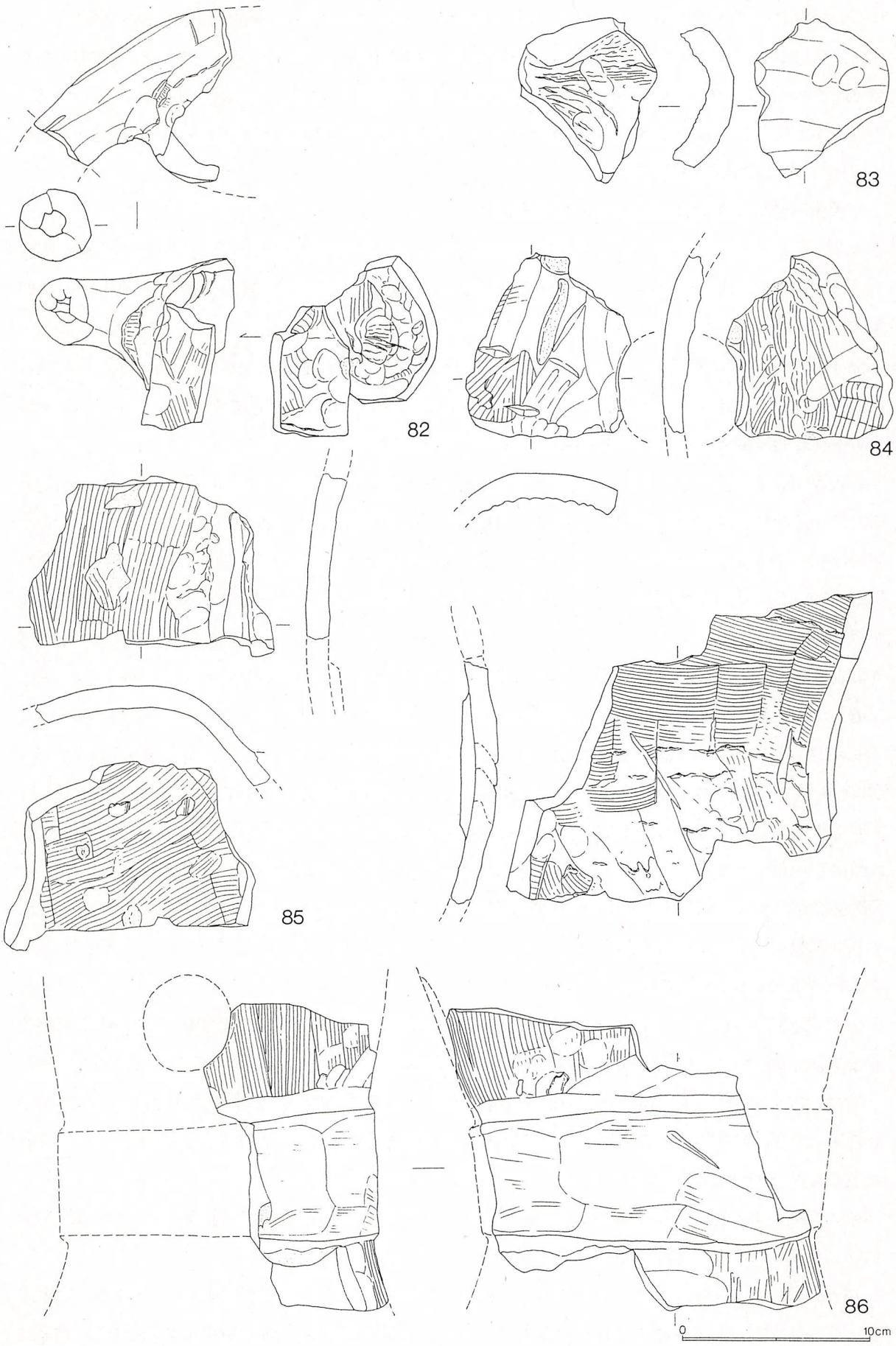
86は腰部背面である。造出部４Ｔと内堀４Ｔの注記のある破片が接合している。帯上方の最もくびれた位置での復原値で、幅18.7㎝、厚さ16.5㎝を測り、大型の人物像といえるが、全身像となるのか半身像となるのかは不明である。腰は緩やかにくびれており、そこに薄い粘土を水平に貼り付けて、大帯の表現が行われている。最大幅は7.8㎝を測る。また、体部側面には直径5.0㎝前後と推定される円形透孔が外面から鋭利な刃物によって穿孔されている。その位置は脇の下よりも低い。

外面調整はタテハケ（16本／2.6㎝）の後、粘土帯を貼り付け、ヨコナデを加える。内面調整は緩い右上がりのナナメハケ（18本／2.7㎝）である。外面の一部（帯の上方）は還元がかっており、オリーブ灰色を呈する。胎土には拡大鏡による観察によって、82で掲げたもののほかに、角閃石と鉄石英を追加できたが、海面骨針は発見できなかった。

なお、同一個体の腰部右脇部で、円形透孔の一部を含み、大帯の剥離したむ破片（内堀４Ｔの注記あり）が１片あるが、実測を割愛した。資料管理の必要上86ｂとしておきたい。

○腋に円形透孔のある人物

84は前述の82～86と近似する特徴を持っており、同一個体か否かを検討したが、主に内面調整の違い、色調のわずかな差から別個体と判断した。右肩部背面の破片である。造出部４Ｔの注記がある。腋の下には円形透孔を鋭利な刃物で穿孔するが、１周ではなく、２周することによって切り離している。腕の接合箇所内面には絞り目が顕著であり、肩部孔周縁部を薄く摘み出す82と同一の技法が採用されていることがわかる。



第11図　稲荷山古墳出土形象埴輪実測図７

外面調整はタテハケ及びナナメハケ（4本／0.8㎝）の後、縦位のナデを加える。内面調整はタテハケ（8本／2.0㎝）である。外面の一部（帯の上方）は還元がかっており、オリーブ灰色を呈する。胎土は細砂を少量含み、石英、チャート、凝灰岩粒を基本組成とし、他に、長石、酸化鉄粒、鉄石英、火山ガラス、角閃石、輝石、片岩が観察される。焼成は良好にして、極めて堅緻で、外面と器肉は淡褐色、内面は黄褐色を呈する。

○斜格子文の帯を締め意須比を付ける巫女１

87は斜格子文の帯を締める人物の腰部背面の破片である。池の注記がある。成形は円筒基台部の端部を外下がりの斜面とし、ここに裾部を接合し、体部を連続的に成形している。帯上方での復原幅は13.8㎝である。腰には粘土帯を平行刻みのある叩き板で叩いて圧着しており、幅3.85㎝、高さ1.0㎝の帯を表現する。表面にはヘラ先で斜格子文が描かれるが、右上がりの斜線を先に、左上がりの斜線を後に施文している。復原図では帯を水平としたが、実際にはわずかに両側に向かって上がる徴候があり、帯を緩やかに締めた状態を表現していた可能性もある。

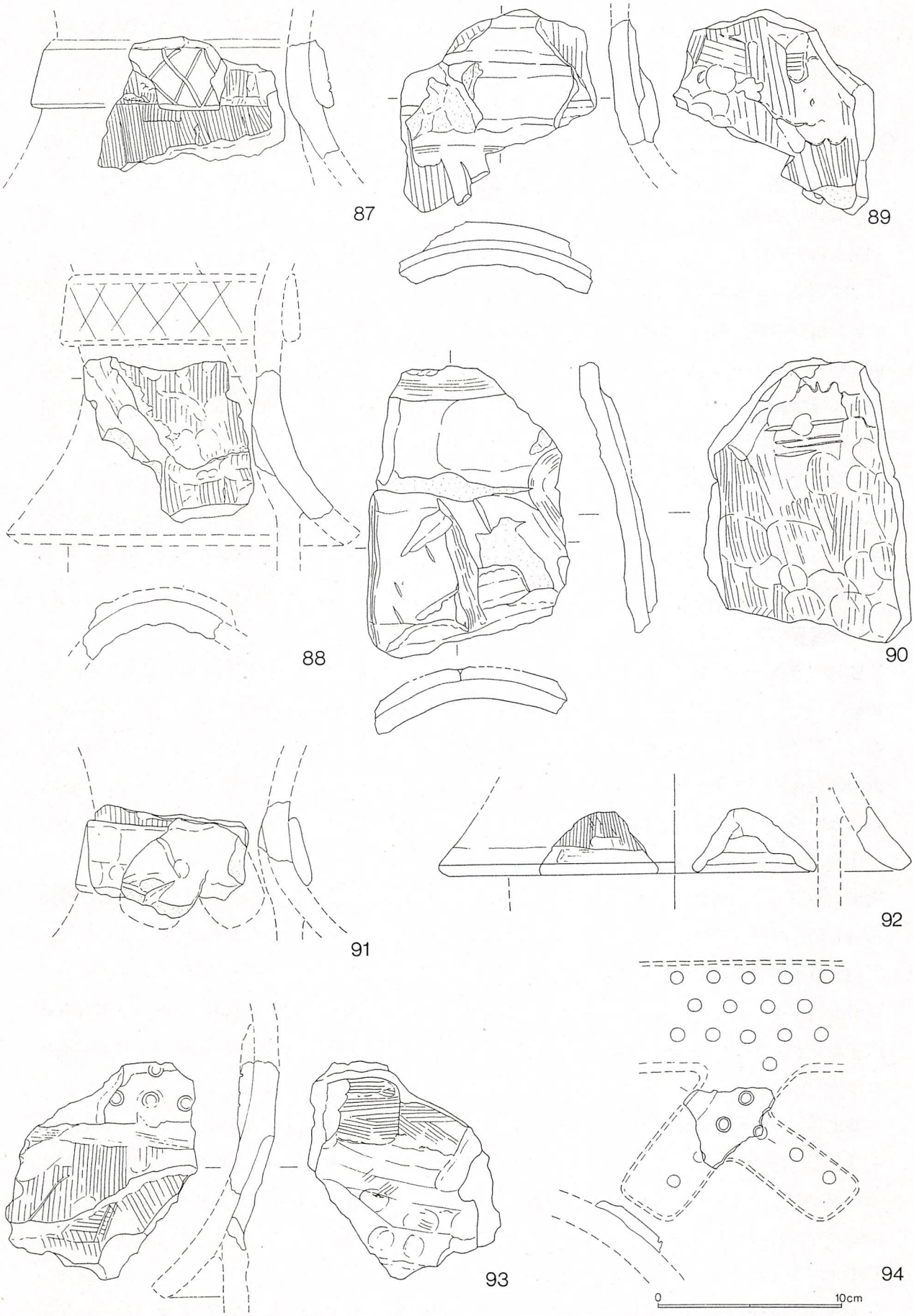
外面調整はタテハケ（13本／2.0㎝）の後、すでにヨコナデ調整を行ってある帯を前述の方法で付ける。内面調整は裾部では横位の、体部では斜位のユビナデを施す。胎土は粗砂を少量含み、石英、チャート、凝灰岩粒を基本組成とし、他に、長石、角閃石が観察される。焼成は半須恵質で、極めて堅緻であるが、内外面に亀裂を生じている。外面と器肉は少し赤みを帯びた暗灰色を、内面は灰赤褐色を呈する。

88は87と同一個体の左腰部破片である。無注記である。成形と内外面調整法は全く共通している。表面には左上がりの斜め方向に広い剥離面があり、左側周縁部には貼り付けた粘土が厚さ7㎜ほど残存していて、ユビナデ調整が施されている。意須比が表現されていたと推定して誤りないであろう。剥離面全体が暗灰色に還元していて、閉塞されていたことが確実であるので、意須比は立体的なものではなく、粘土を厚く貼り付けて、ふくらみを表現したものであったであろう。なお、帯の推定位置が87より少し高い位置となるので、やはり前記したように、帯は水平でなく、両端が上がっていた可能性が高い。焼成は半須恵質で、極めて堅緻であるが、内外面に亀裂を生じている。器肉と内面は87と共通するが、外面は橙褐色を呈する。

○大帯を締め腰に大刀を下げる人物

89は左腰部の破片で、大帯の上に大刀を佩くための帯と下緒が表現されている。内堀４Ｔと池の注記のある破片が接合した。成形は粘土紐巻き上げによって、腰がわずかにくびれ、裾の開く形状にをなす。腰には幅4.8㎝、厚さ5㎜の粘土帯を貼り付けて、大帯を表現した後に、少し下にずれて帯の下半部と一部重なる位置に、さらに幅3.5㎝、厚さ1.2㎝の粘土帯を貼り足して大刀を佩くための帯を表現する。その下端部からは４本の粘土紐が垂下するが、先端部は失っている。詳細にみると、２本ずつが組みとなり、左右に拡がっている。これは大刀の鞘に付けられた２箇所の栗形または足金具に結びつけられていた可能性が考えられる。

体部に外面調整のタテハケ（6本／1.6㎝）を施した後に、まず大帯を貼り付けて、ヨコナデ調整をし、さらに大刀佩きの帯を貼り付け、同じくヨコナデ調整を加える。内面調整はヨコハケ後にタテハケ（7本／1.4㎝）を重ねる。胎土は粗砂をやや多く含み、石英、チャート、凝灰岩粒を基本組成と



第12図　稲荷山古墳出土形象埴輪実測図８

し、他に、長石、角閃石、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好で堅緻である。内外面と器肉が淡橙褐色を呈する。

90は89と同一個体の腰部正面の破片である。大帯とその結び緒が表現されている。大帯は右端でわずかに上がっており、その幅は5.4cmを測るが、高さは5mmしかなく扁平である。下端には粘土を貼り付けて表現した2本の結び緒が下がる。幅はともに5.6cmを測り、帯とほぼ同じである。結び目の表現は伴っていない。89にみられた大刀佩きの帯が表現されていないが、帯より上方へ回っていた可能性が考えられよう。外面調整はユビナデ、内面調整はタテハケで原体は89と一致している。

○帯の結び目のある小型の人物

91は腰部正面の破片で帯とその結び目が表現されている。池の注記がある。帯直上での復原径は10.6cmであり、かなり小型の人物となる。成形は粘土紐巻き上げで、円筒基台部の端部外側に裾部を接合する技法が採られている。腰は強くくびれ、粘土帯を圧着して幅4.0cmの帯を表現し、さらにその上面に、楕円形の粘土2枚をハの字状に叩き板で叩いて圧着している。これは90の例と比較すると、緒が帯の上面にあるので結び目を含む端部の表現といえよう。

体部の外面調整はタテハケ（5本／1.1cm）、内面調整は斜位のユビナデである。胎土は粗砂をやや多く含み、大粒の凝灰岩粒が目立つほか、石英、チャート、長石、角閃石、酸化鉄粒、片岩、鉄石英が観察される。焼成は良好で堅緻である。内外面は暗赤褐色、器肉は暗茶褐色を呈する。

○半身像人物の裾部1

92は半身像人物の裾部と推定される。5Ｔ1区表土の注記があり後円部墳頂からの出土である。10%の小破片からの復原実測であるが、裾端部での復原径は26.0cmを測る。粘土紐巻き上げ成形によるが、作りが丁寧で、端部の調整も手抜きがない。外面調整はタテハケ（15本／2.0cm）、内面と端部の調整は布を伴うヨコナデである。胎土は細砂をごく少量含む精選土で、凝灰岩粒、石英、長石、角閃石、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好で堅緻である。内外面器肉ともに淡褐色を呈する。

○円文のある大帯を締めた人物

93は腰から上着の裾にかけた破片で、円文のある大帯を締めている。第3次稲荷山古墳の注記がある。成形は円筒基台部の上端部数cmを内傾させ、その外側に裾部を貼り足すとともに、体部を粘土紐巻き上げによって一体的に製作している。腰の位置には厚さ0.7cmの粘土帯を水平に貼り付けて帯を表現するが、上縁部は失っており、幅が不明である。表面には直径0.85cmの竹管を等間隔に刺突することによって、円文を上下2段に施している。同一個体の94の復原図に示したように、おそらく3段の円文を施し、幅は6cm前後あったと推測される。

外面調整は刻みの浅いタテハケ（14本／2.6cm）を施した後に、大帯を貼り付けて、ヨコナデ調整を加える。内面調整はナナメハケ及びヨコハケ（10本／1.5cm）後に斜位のユビナデを加える。胎土は小礫と粗砂をやや多く含み、石英、チャート、凝灰岩粒を基本組成とし、他に、長石、角閃石、酸化鉄粒、片岩、鉄石英が観察される。焼成は良好で堅緻である。内外面は茶褐色、器肉は暗茶褐色を呈する。

94は93と同一個体で、外堀11Ｔの注記がある。体部から接合面で剥離した帯の結緒であり、交差部を含んでいる。外面はヨコナデ、内面には長手方向のハケ調整が施されており、だいぶ乾燥が進ん

だ後に本体に圧着したことが推定される。外面には93と同一原体による円文が等間隔に施文されている。復原図に示すように、大帯から緒が左下がりに表現され、その途中から右下がりの緒が分岐してハ字状になると推定される。

○斜格子文の帯を締め意須比を付ける巫女２

95は後円部墳頂から出土し、胎土、焼成、色調の一致する同一個体の４破片から積極的な復原実測を行ったもので、斜格子文の帯を締め意須比を付ける巫女となる。

ａは襟を含む胸部の破片で、６Ｔ２区北拡と６Ｔ１区表土の注記のある２片が接合する。右端は少し前方に摘み出されていて、腕の付け根付近となる。左端には粘土帯を斜めに貼り付けた段が形成されており、右肩から斜めに下がる意須比の表現と推定される。また、右側上端部には赤彩が施されており、襟の縁取りを表現するものであろう。外面調整は丁寧なナデ、内面調整はヨコハケ（15本／2.2㎝）の後、斜位のユビナデを部分的に加える。

胎土は細砂をごく少量含む精選土で、大粒の凝灰岩粒が目立つほか、石英、長石、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好で堅緻だが、少し粉っぽい。内外面は暗い淡褐色、器肉は灰黒色を呈する。

ｂは粘土貼り付けによって意須比が表現された破片で、その右端には高さ1.0㎝の段を形成している。５Ｔ１区表土の注記がある。

ｃは腰部の向かってやや右よりの部分で、６Ｔ１区表土Ⅱの注記がある。報告書に第59図5として拓影図が掲げられている破片である。粘土帯の貼り付けによって幅4.0㎝、高さ0.5㎝の帯が表現されている。帯は右側が高く、中心部に向かって下がるので、緩やかに締められた状態を表現したものであろう。表面にはヘラ先による沈線で、斜格子文が描かれている。その施文順序は左上がりの斜線をまとめて先に引いておいて、次に右上がりの斜線をまとめて引いている。帯の下の位置には薄い粘土が斜めに貼り付けられていて、意須比を表現したものとみられる。右側の側縁部が現存するが、反対側の側縁部は残っていないので、幅は不明だが、残存幅は8.0㎝ある。外面調整は体部、帯ともに丁寧なナデ調整、内面調整は下位でナナメハケ（11本／1.1㎝）、上位で斜位のユビナデである。

ｄは裾部の破片で、６Ｔ１区表土の注記がある。円筒部との接合部は残っていないが、現存長が9.5㎝あり、かなり長い裾を有していたことがわかる。また、体部に比して分厚い製作である。内面に明瞭に残る粘土紐巻き上げ痕は断面で内傾しているので、裾部を正立状態で別体製作して円筒部に取り付けた可能性が考えられる。外面調整は右上がりのナナメハケ（12本／2.1㎝）、内面と端部の調整は布を伴うヨコナデである。外面には上部にもヨコナデが２条巡っているが、これは上着と裳の境界を示すものであった可能性があり、裾は復原図よりもう少し下に付いていたことも考えられる。したがって、円筒器台部を伴っていたとしても、全身像であったと言うことができるかもしれない。この場合、足は裳に隠れて見えない状態を再現したことになろう。

○片手で壺を持つ人物

96は人物の手から剥落した壺である。内堀４Ｔの注記がある。残存率は口縁部50％、体部70％である。器形は体部がほぼ球形をなすが、中位に稜を持つ。口縁部はいったん直立してから外反して開き、端部は薄く尖る。底部は底抜けで、端部の調整は粗雑である。器高9.5㎝、体部最大径9.0㎝、口縁部径8.3㎝を測る。成形は粘土紐巻き上げで、外面調整は体部下半がナデ、体部上半から口縁部

が粗いタテハケ（7本／1.9cm）の後、肩部付近には斜位のケズリを加える。内面調整は体部ではナデで、先行する指頭圧痕は認められるが、粘土紐接合痕はほとんど残していない。口縁部では粗いナナメハケの後、ヨコナデを加える。

底部付近を除く外面と口縁部内面には赤彩が施されている。また、底部付近には図示したような手からの剥離痕がある。右手の拇指を立て他の４指を揃え、掌を丸くして壺の底部をくるむような状態での持ち方を示し、特に、指を圧着した部分にはくぼみを生じている。おそらく、右手で壺を高く掲げ持つ姿態が示されていたものであろう。

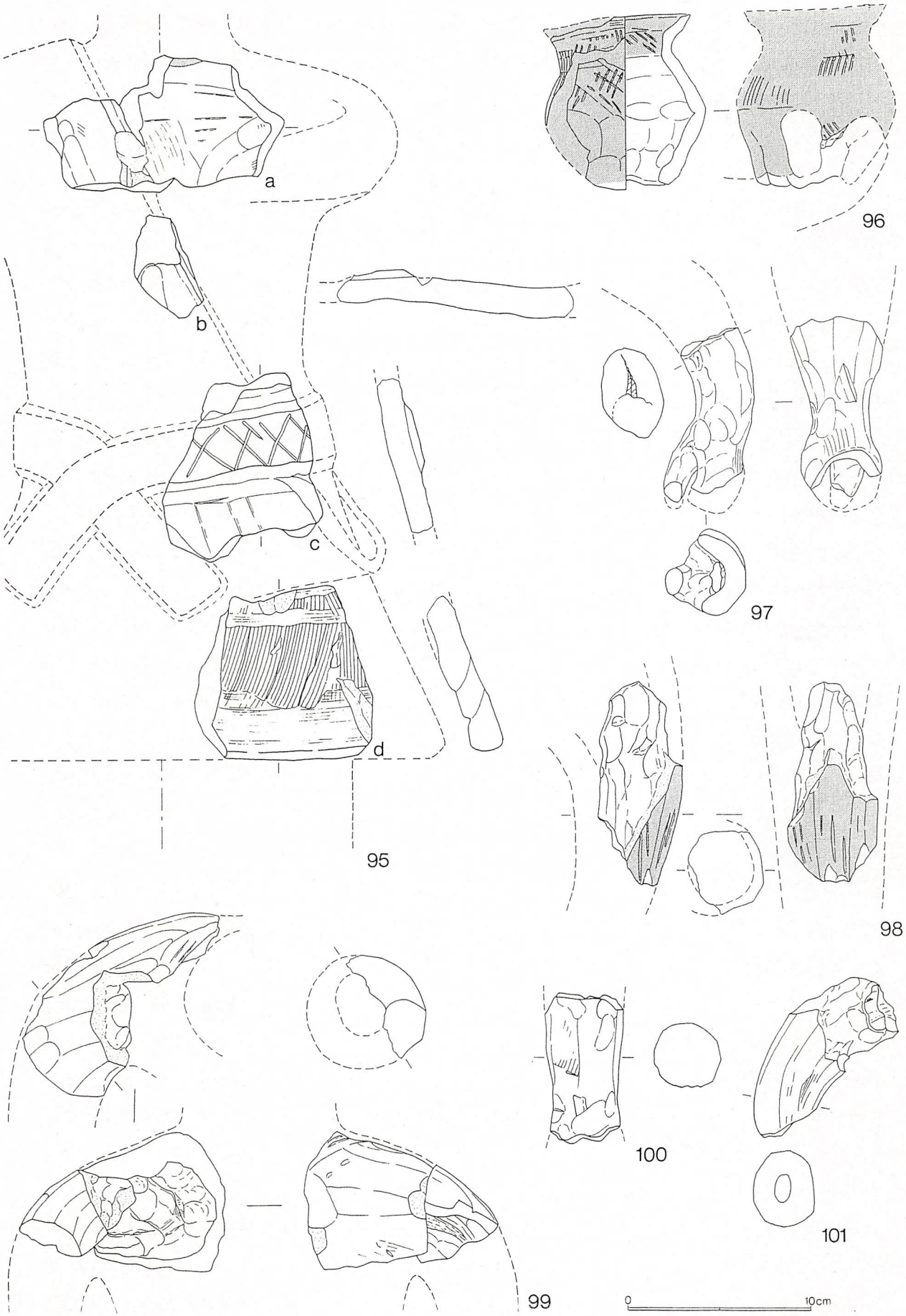
胎土は細砂をごく少量含む精選土で、キメが細かい。角閃石、石英、長石を基本組成とし、他に、チャート、酸化鉄粒、白色パミス、細粒の凝灰岩粒が観察される。焼成はやや軟質で、少し粉っぽい。内外面、器肉ともに乳白色を呈する。

○人物埴輪の腕

97は中空製作の左腕の手首付近から掌の部分である。４Ｔ造出の注記がある。腕全体の形状は内側に強く湾曲している。腕の断面形は上下幅の大きい卵形を呈し、手首でくびれた後に、拇指と掌を立体的に表現する。拇指は独立するが、他の４指は掌の部分しか残存していないので、個々の指の表現を行っていたか否かは不明である。また、拇指と掌の間はＵ字形に開いており、掌全体の横断面が半円形をなしているので、指を丸めるようにして何かを鷲掴みする表現となる。製作技法は、１枚の粘土板の両側端を綴じ合わせて中空の腕とするもので、掌の中心部まで孔が貫通するが、手首付近は絞り込んだために、孔が潰れて塞がっている。外面調整は長手方向のハケ調整後に、ナデを加えて、ハケ目を擦り消している。内面には粘土板調整時点で長手方向の粗いハケ目が施されている。胎土は細砂を少量含み、角閃石、石英、長石を基本組成とし、他に、チャート、酸化鉄粒、細粒の凝灰岩粒が観察される。焼成は普通だが、少し粉っぽい。わずか１㎜程度の外表だけが黄色みを帯びた乳白色を呈するが、分厚い器肉と内面は黒色を呈する。

98は中実製作で臍を有する腕の上腕部である。外堀□Ｔの注記がある。腕全体の形状は内側に緩やかに湾曲している。製作技法は、１枚の粘土板を丸め、端部を丸く収めて臍とし、これを肩部の孔に差し込み、こ接合部の外側部分に薄く粘土を貼り足すことによって腕を固定するとともに、外観を体部と一体的に整えたものである。外面調整は長手方向のハケ調整後に、ナデを加えて、ハケ目を擦り消している。臍部の外面には粘土板調整時点で長手方向の粗いハケ目が施されている。また、腕の外面には、現状ではだいぶ薄れてはいるが、赤彩が全面的に施されている。胎土は細砂を少量含み、角閃石、石英、長石を基本組成とし、他に、チャート、酸化鉄粒、細粒の凝灰岩粒、輝石が観察される。焼成は普通だが、少し粉っぽい。わずか２㎜程度の外表だけが乳白色を呈するが、分厚い器肉は暗灰色を呈する。

99は中空製作の右腕の付け根から首付近を含む肩部背面の部分である。イ６Ｔ１区表とイ６Ｔ１区表土攪乱の２片が接合する。腕は肩から曲線を描いて、前方やや下方に突き出す状態を示す。根本付近では断面形は円形を呈し、復原径は6.5cmと太い。製作技法は、粘土板の両側端を綴じ合わせて中空の腕とするもので、接合方法は根本の部分をやや薄く摘み出し、肩部の孔の内側にわずかに差し込み、外に出ている部分に厚さ１cmほどの粘土を貼り足して、固定するものである。腕の外面



第13図　稲荷山古墳出土形象埴輪実測図９

調整は長手方向の丁寧なナデ、内面は粘土板調整時点で長手方向の粗いハケ目が施されているが、丸めた時点で絞り目が加わっている。体部は粘土紐巻き上げ成形で、肩の部分には細かく粘土を貼り足して、肩の孔を作りだしている。したがって、肩部の孔は穿孔したものではない。胎土は細砂を少量含み、角閃石、石英、長石を基本組成とし、他に、チャート、酸化鉄粒、細粒の凝灰岩粒、輝石、雲母が観察される。焼成は良好で、内外面は明るい淡褐色、器肉は灰黒色を呈する。

100は中実製作の腕の膊腕部から手首の部分である。注記は不明瞭で読めない。腕全体の形状は断面形が正円形で、手首に向かって直径を減じ、掌で再び太くなる。製作技法は、粘土を転がして丸めたものかとみられる。外面調整は長手方向のハケ調整後に、ナデを加えて、ハケ目を擦り消している。胎土は粗砂をやや多く含み、大粒の凝灰岩粒と大粒の酸化鉄粒が目立って多いほか、角閃石、石英、長石、チャートが観察される。焼成は内部は堅緻だが、表面が軟質で、少し粉っぽい。外面は黄褐色の面と橙褐色の面があり、器肉は暗茶褐色を呈する。

101は中空製作の上腕部である。外堀４Ｔの注記がある。腕全体の形状は内側に強く湾曲している。腕の中間部での断面形は上下幅の大きい卵形を呈し、幅は4.3㎝、孔の長径は1.6㎝を測る。製作技法は、円棒に粘土を巻き付け、乾燥が少し進んで一定の強度になった段階で、これを引き抜く木芯中空技法が採用されているらしい。根本から5.6㎝の範囲には補強用の粘土が貼り足されているが、剥離している部分が多い。また、根本の部分は端部が薄く摘み出され、孔の長径も3.2㎝と大きくなっている。これはおそらく棒をぐりぐりとこじ回して孔を拡大し、薄く広げる技法を用いたものであろう。この端部を肩の孔に少し差し込んだ状態で、補強用の粘土で肉付けすることによって、体部への固定と外観の完成が行われたものと推定される。外面調整は長手方向のハケ調整後に、ナデを加えて、ハケ目を擦り消している。内面調整は粘土板調整時点で長手方向のユビナデが施されている。胎土は粗砂を少量含み、チャート、石英が目立つほか、角閃石、長石、酸化鉄粒、細粒の凝灰岩粒、黒色軟質粒と細かい海面骨針２点が観察される。焼成は良好にして堅緻である。内外面、器肉とも明るい茶褐色を呈する。

102は臍を有する腕で、指の状態から右腕の可能性が高い。４トレ西拡池内造出部外堀一括Ｓ49.2.30のラベルを伴っている。指の先端以外を完存している。腕全体の形状は内側に緩やかに湾曲しているが、臍の状態からみて前方に突き出したり、下に下げることは不可能なので、上方に掲げられていた可能性が最も高い。製作技法は、粘土を転がして芯棒（最大径4.5㎝）を作り、根本の部分を摘み出して臍とし、これを肩部の孔に挿入し、接合部の外側に補強用の粘土を貼り付けて完成したものである。この観察は外見からのものであって、断面観察ができないので、中空製作か中実製作は不明であるとしなければならない。腕の最大径は接合部付近にあり、6.2㎝ある。手首に向かうに連れ細くなり、3.4㎝となる。掌は粘土貼り付けによって浅い椀形に作り、５本の指はそれぞれ独立して表現する。拇指は他の４指から離れて独立する。他の４指は根本が接しているが、上方へ向かって少し開いている。この指の形状は小さなものを掴む様子を示したものであり、現存部に剥離痕はないが、指先には坏が付けられていた可能性を提示しておきたい。外面調整は長手方向のハケ調整後に、ナデを加えて、ハケ目を擦り消している。臍部の外面には指頭押圧痕が残る。胎土は粗砂をやや多く含み、大粒の凝灰岩粒と石英、チャートが目立つほか、角閃石、長石、酸化鉄粒と微細な海面骨針

2点が観察される。焼成は不良にして軟質で、表面が風化しており、手に粉が付く。外面は淡橙褐色を呈する。

103は中空製作の腕から腋の下の部分である。4Ｔ造出№7の注記がある。腕は肩から体側上方に向かって斜めに挙げられており、直線的に伸びる。断面形は正円形を呈し、根本付近では径が5.9cmある。先端に向かって直径を減じ、手首では3.3cmとなる。掌は粘土貼り付けによって浅い椀形に作る。5本の指は失っているが、拇指の付け根は前方にあって独立しており、他の4指は後方にまとまっていて、指先を揃えていたものかもしれない。現存部に剥離痕はなく持ち物の有無は不明であるが、左手であるので馬子となる可能性も考えておかなければならない。製作技法は、平面台形状の粘土板の両側端を綴じ合わせて、中空の腕とするもので、接合方法は根本の部分をやや薄く摘み出し、肩部の孔の内側にわずかに差し込み、外に出ている部分に厚さ1.2～1.6cmほどの粘土を貼り足して、固定するものである。腕の外面調整は長手方向のハケ調整（14本／1.9cm）、内面は粘土板調整時点で長手方向のユビナデが施されている。体部は粘土紐巻き上げ成形で、外面は腕を接合した後に脇の下から腕に向かってハケ調整を行っている。内面はユビ押さえと粗いナナメハケ調整が施されている。胎土は細砂を少量含み、石英、チャート、凝灰岩粒が目立つほか、長石、角閃石、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通だが、少し粉っぽい。外面は淡黄褐色、体部内面はくすんだ乳白色、器肉は灰黒色を呈する。

104は中実製作の腕の破片である。5Ｔ1区表土の注記がある。後円部墳頂からの出土である。緩やかな湾曲が認められる。直径が3.4cmと細いので膊腕部であろう。粘土板を二つに折り曲げて成形されており、外面調整は長手方向のハケ調整後に、ナデを加えて、ハケ目を擦り消している。胎土は細砂を少量含み、角閃石、チャート、凝灰岩粒が目立つほか、石英、長石、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。外面はくすんだ乳白色、器肉は芯のみがオリーブ灰色を呈する。

105は腕の臍部である。6Ｔ2区南拡表土の注記がある。後円部墳頂からの出土である。粘土板を「の」字状に巻いて成形しており、外面調整はユビ押さえと長手方向のユビナデである。胎土は細砂を少量含み、角閃石、チャート、凝灰岩粒が目立つほか、石英、長石、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通で、少し粉っぽい。外面はくすんだ乳白色、器肉は暗灰色を呈する。胎土と色調の一致から、104と同一個体の可能性がある。

106は中空製作の上腕部で臍を伴っている。無注記である。腕全体の形状は内側に緩やかに湾曲している。腕の断面形は正円形で、先端付近の直径は3.3cm、孔の長径は1.4cmを測る。製作技法は、円棒に粘土を巻き付け、乾燥が少し進んで一定の強度になった段階で、これを引き抜く木芯中空技法が採用されているらしい。端部はユビ押さえで細く絞って臍とし、これを肩の孔に挿入し、補強用の粘土で肉付けすることによって、体部への固定と外観の完成が行われたものと推定される。外面調整は長手方向のハケ調整後に、ナデを加えて、ハケ目を擦り消している。胎土は粗砂をやや多く含み、特に凝灰岩を縞状またはマーブル状に多く含むことが特徴である。他の鉱物としてはチャート、石英、角閃石、長石（溶解したものを含む）、酸化鉄粒が観察される。焼成は不良にして軟質で粉っぽい。内外面、器肉とも淡橙褐色を呈する。

111は中空製作の右腕の付け根から上腕部である。造出部4Ｔの注記がある。腕は前方に突き出す

状態を示す。根本付近では断面形は倒卵形を呈し、長径は6.0㎝を測る。体部と腕の接合方法は肩の孔の端部をわずかに摘み出し、その外側に腕を接合し、脇の下の部分に厚く補強用の粘土を貼り足すものである。中空の腕は内面に粘土紐接合痕と継ぎ目が長手方向に観察されることから、４本の粘土紐を合わせて１枚の粘土板とし、これを丸めて両側端で綴じることによって製作したものとわかる。器肉は1.0から1.3㎝の厚さである。外面調整は先に体部をタテハケ調整（7本／1.3㎝）しておき、腕を接合した後に、体部から腕にまたがる長手方向のハケ調整を行う。内面は体部では丁寧な縦位ナデ、腕の内部では綴じ目に対する軽い指頭ナデである。胎土は粗砂をやや多く含み、チャートの細礫と凝灰岩粒が目立つほか、酸化鉄粒、、角閃石、石英、長石が観察される。焼成は良好だが、表面は少し粉っぽい。内外面は橙褐色、器肉は灰茶褐色を呈する。

112は臍を有する中実製作の腕の上腕部である。イ１３Ｔの注記がある。腕全体の形状は内側に強く湾曲している。肩の部分が残存していないので、前方に突き出していたのか、腰に手を当てるような仕草であったのかは不明である。表面の肉付け部分が剥離して、心棒の部分が広く露出している。製作技法は、粘土板を丸め、ユビ押さえして雑に成形した中実の長い芯棒（最大径3.4㎝）を作り、全体を曲げてから、これに１㎝前後の厚さで肉付けを行っている。肉が剥離していて、臍との境界部がわかりにくいが、灰色に還元している部分が肉付けの剥がれた部分とした場合、臍の長さは6.3㎝となり、かなり長いことになる。これを肩部の孔に挿入し、接合部の外側に補強用の粘土を兼ねた肉を貼り付けて完成したものであろう。外面調整は長手方向の布目を伴うナデである。胎土は細砂を少量含み、大粒の酸化鉄粒とチャート細礫が目立つほか、凝灰岩粒、石英、角閃石、長石が観察される。焼成は普通だが、かなり粉っぽい。外面は黄色みを帯びた乳白色、器肉は灰色を呈する。

113は臍を有する中実製作の腕の上腕部である。池の注記がある。製作技法は、中実の芯棒に１㎝前後の厚さで肉付けを行って腕とするものである。臍の長さは2.7㎝と短く、円錐状に尖る。外面調整は長手方向のハケ調整の後、これを撫で消している。外面には細い円棒で引いた浅い凹線が巡る。胎土は細砂を少量含み、チャート、凝灰岩粒、石英、角閃石、酸化鉄粒、、長石が観察される。焼成は普通だが、かなり粉っぽい。外面は暗橙褐色、器肉はチョコレート色を呈する。

120は中空製作の左腕の付け根から胸の部分である。無注記である。腕は前方やや下方に突き出す状態を示す。根本付近では断面形は正円形を呈し、直径は4.2㎝を測る。体部と腕は一連に作られているように見えるが、詳細に観察すると、体部を成形する際に、腕の付け根の位置に丸い孔を形成するように行い、孔の端部をわずかに摘み出し、その外側に腕を接合している。中空の腕は内面に粘土紐巻き上げ痕が残る。器肉は0.7㎝前後と薄手で、製作も丁寧である。外面調整は先に体部をタテハケ調整（8本／1.7㎝）しておき、腕を接合した後に、体部から腕にまたがる長手方向のハケ調整を行う。内面は体部では丁寧な横位ナデを施すが、粘土紐接合痕をわずかに残す。腕の内部は軽い指頭ナデである。胎土は粗砂をやや多く含み、チャートの細礫と大粒の酸化鉄粒が目立つほか、凝灰岩粒、角閃石、石英、長石が観察される。焼成は良好だが、表面は少し粉っぽい。内外面は橙褐色、器肉は青味をおびた灰色を呈する。

○紐状の細い帯を締め腕を前方に伸ばす人物

108は紐状の細い帯を締める人物埴輪半身像である。造出の注記がある。体部背面の腰から胴部と

左肩部が残存している。成形は粘土紐巻き上げによっており、腰のわずかにくびれた部分に断面台形で下底幅1.8㎝、高さ1.0㎝の凸帯を水平に貼り付けて、細い紐状の帯を表現する。帯より下の腰部は少し開く形状をとるが、現存部には円筒器台部との接合部はない。帯より上の体部は次第に幅を増して肩幅が最大となる。また、左腕を接合するための付け根が造りだされていて、孔の開口部は前方に向かっているので、腕を前方に伸ばしていたことが確実である。左右が対称形につくられて、壺を捧げ持つ姿態を取っていた可能性も十分考え得る。

腕の付け根下部には腕の重さを支える目的で、断面形逆三角形の補強用の粘土が貼り足されているが、このような特徴的な断面形を持つ腕が他にもある（114）ので、本例の腕を推定する材料となろう。おそらく開口部には臍のある腕が挿入されていたであろう。外面調整はタテハケ（10本／1.6㎝）で、肩と腕の部分にはユビナデを加えている。内面調整はタテハケ後に縦位の強いユビナデを加えている。

なお、背中には左上がりの斜位に赤彩部が残る。着衣に関係する表現であろうが、残存部がほんの一部でしかないために不明である。また、外面には多数の円形の剥離痕がある。厳冬期に水分のために凍って爆ぜた痕跡であろうか。

胎土は細砂を少量含み、凝灰岩粒、チャート、石英、角閃石、長石、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通だが、少々軟質で粉っぽい。内外面は淡橙褐色主体で部分的に肌色、器肉は青みがかった灰色を呈する。

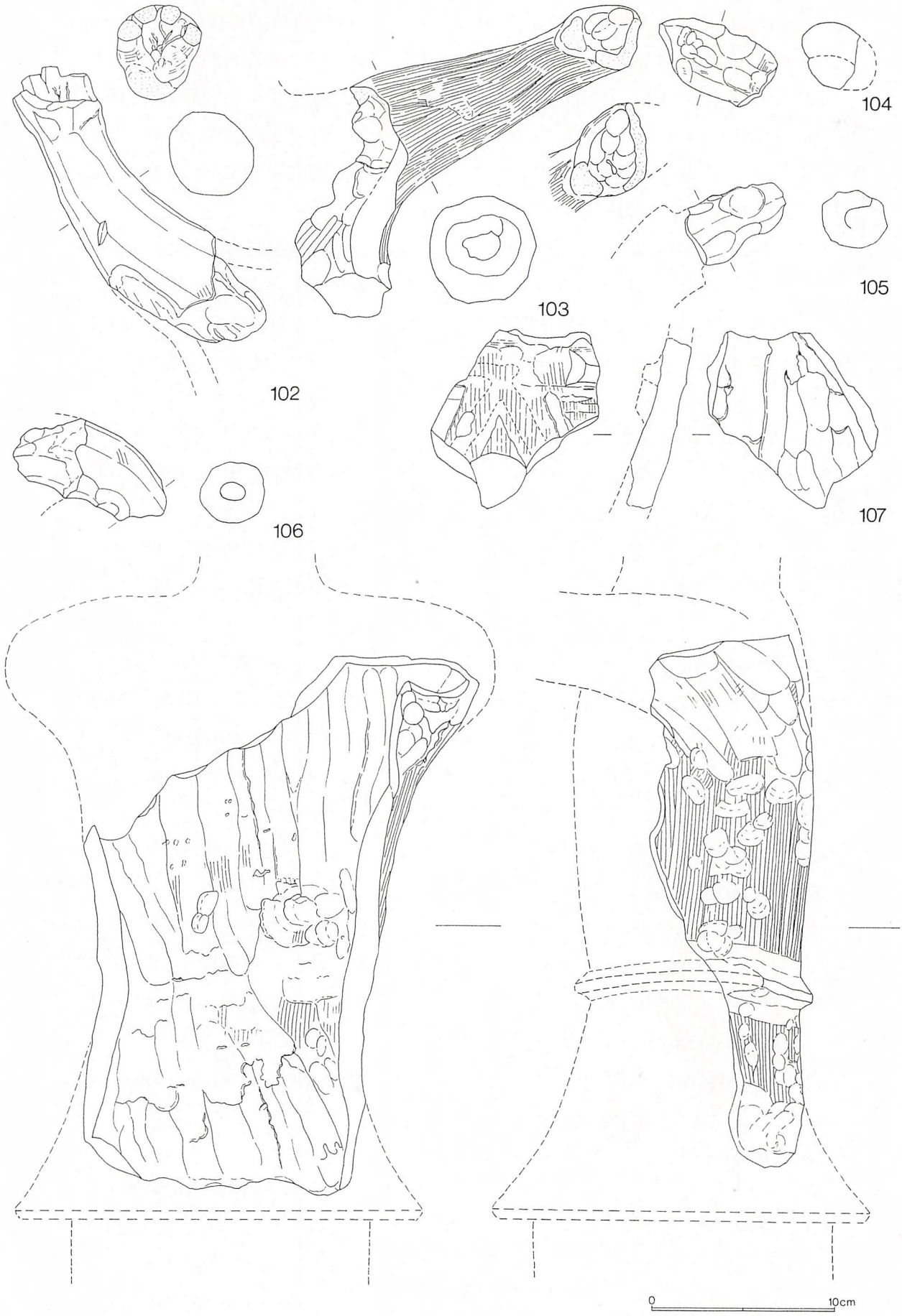
107は人物埴輪腰部正面の部分で、帯と結緒の表現がある。内堀４Ｔの注記がある。裾に向かって緩やかに外反しながら開くが、現存部には円筒器台部との接合部位はない。成形は粘土紐巻き上げで、外面調整はタテハケ（8本／1.1㎝）、内面調整は縦位の強いユビナデである。外面には下底幅2.0㎝、高さ1.0㎝で、断面形が台形状の凸帯を水平に貼り付けて、帯を表現し、その下部からハ字状に開く結緒を付けるが、剥離している。粘土が貼り付けられていた部分は1.0㎝幅の灰色に還元している。胎土、焼成、色調、内外面の調整と帯の特徴が一致するので、108と同一個体としてよい。

○襟首を赤く縁取る人物

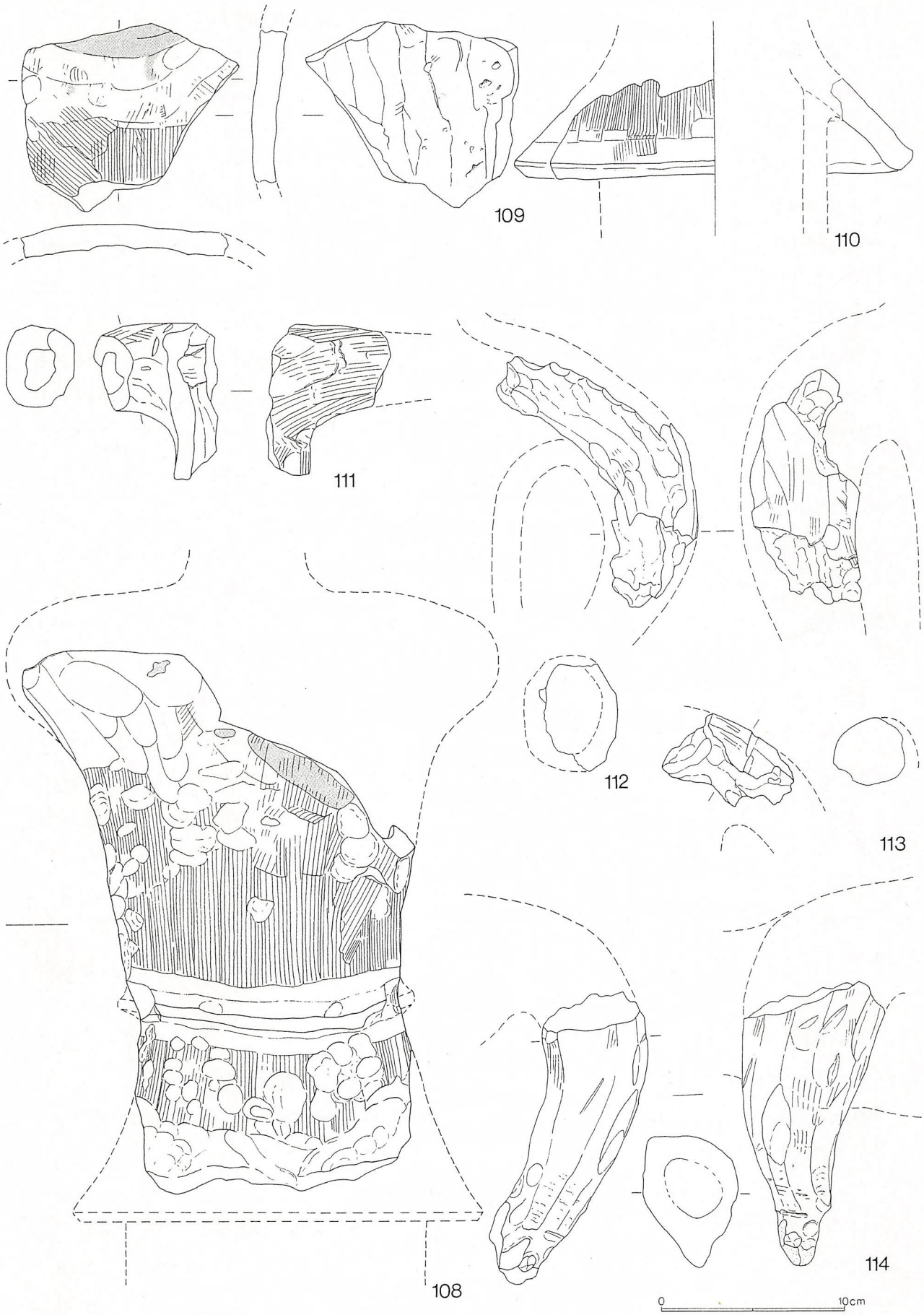
109は人物の胸部または背中の破片で、上端には弧状の赤彩が施されており、着衣の襟の赤い縁取りを表現したものとみられる。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整はタテハケ及びナナメハケ（15本／2.5㎝）で、首付近には横位のナデを加える。内面調整はナナメハケ後に縦位の強いユビナデを加えている。胎土は細砂を少量含み、凝灰岩粒、チャート、石英、角閃石、長石（溶解したものを含む）、酸化鉄粒、輝石が観察される。焼成は普通だが、少々軟質で粉っぽい。内外面は淡黄褐色、器肉は青みがかった灰色を呈する。

○半身像人物の裾部２

110は半身像人物の裾部と推定される。表採の注記がある。25％の破片からの復原実測を行った。裾端部での復原径は22.0㎝を測る。腰の直径は10㎝強と推定されるので、かなり小型の人物埴輪となる。成形は粘土紐巻き上げによっており、粘土紐の傾斜は内下がりである。端部は平坦であり、板によるナデ調整と推定される。外面調整はタテハケ（14本／2.3㎝）、内面と端部の調整は強いヨコナデである。胎土は細砂を少量含み、凝灰岩粒、石英、チャート、角閃石、長石、酸化鉄粒、片岩が



第14図　稲荷山古墳出土形象埴輪実測図10



第15図　稲荷山古墳出土形象埴輪実測図11

観察される。焼成はやや軟質で粉っぽい。内外面はくすんだ淡褐色、器肉は暗褐色を呈する。

○手玉を付け前方に突き出す巫女の腕

114は中空製作の腕の手首から上腕に至る部分である。付け根の部分と掌は失っている。内堀４Ｔの注記がある。全体の形状は緩やかに内側に湾曲している。元の部分での断面形は無花果形を呈し、上下方向での幅は7.2㎝を測る。108の巫女埴輪にみられる腕の付け根の形状を参考にすると、逆三角形に尖る部分が下となることは疑いない。したがって、腕を前方に突き出す状態となり、逆三角形の部分は腕を支えるためにアングルの役割を負わされていたものとみられる。この補強用の粘土は次第に厚みを減じ、中程で消えている。

製作技法の推定であるが、根本の破断面では中実にみえるけれども、手首側の破断面に不正形の小孔があり、深さ10㎝まで中空であることが確認できる。このことから、粘土板を丸めて両側端を綴じ（手首側では綴じ目を確認できる）、中空の芯を作り、一方の端部を絞って臍とし、これを肩の孔に挿入し、接合部付近に厚く肉付けをして固定したものと推定される。とくに、脇の下の部分には前述のような逆三角形の補強用粘土を貼り足す。外面調整は長手方向のハケ調整後にナデを加える。手首外面には円形粘土粒１箇所とその剥離痕１箇所が並んでおり、手玉の表現とみられる。このことから女性であることはほぼ間違いなく、腕の形状と合わせて推測すると、両手で持ち物を捧げ持つ巫女像となる可能性が高い。胎土は細砂を少量含み、凝灰岩粒、石英、チャート、角閃石、長石、酸化鉄粒、片岩が観察される。焼成は良好だが、やや軟質で粉っぽい。外面は淡褐色、器肉は灰褐色を呈する。

○弓を担ぐ靫負人と推定される胸部

115は人物の胸部で首と左腕の付け根を含んでいる。無注記である。成形は胸の部分は粘土紐巻き上げで、首の付け根付近は無調整で、粘土紐をそのまま残す。腕の付け根は孔の周縁部を指先で薄く摘み出してあり、その外側に腕が接合されていた痕跡が残る。したがって、臍を用いない中空の腕が取り付いていたことになる。外面左肩直下には平面形が三日月形を呈する粘土塊が貼り付けられており、周囲にはその撫で付け痕がある。表面は剥離しており、残存高は0.8㎝である。付けられている位置と規模からみて、弓が取り付けられていた可能性が高いであろう。左肩口が下がっていて、腕が下方に向かうと推定されることからも、左の掌で弓筈部が保持されていたとみることに齟齬を来さない。

外面調整は下部ではタテハケ、首の付近ではナナメハケ（9本／1.9㎝）である。首の付け根にはユビナデが施されている。内面調整は丁寧な横位のナデであるが、粘土紐接合痕が少し残る。胎土は細砂を少量含み、凝灰岩粒、石英、チャート、角閃石、長石、酸化鉄粒、火山ガラスが観察される。焼成は良好だが、表面は少し粉っぽい。内外面は橙褐色、器肉は暗茶褐色を呈する。

○人物に付属する鹿角装大刀

116は人物に付くと推定される大刀の柄部分である。５Ｔ２区２層の注記がある。後円部墳頂からの出土である。断面円形の粘土棒の先端と途中に粘土を貼り付けて、ラッパ状に開く把頭と突起部とを作る。現存長は6.3㎝である。

把頭面は浅いくぼみを形成していて、中心部に細い円棒で刺突した小孔があり、これを挟むように

してヘラ先による２本の縦方向の沈線が引かれ、その内部が赤彩されている。また、孔の左右にもそれぞれ横方向の沈線が引かれている。突起部は把頭から4.0㎝離れた上面に貼り付けられていて、断面形はトラック形を呈する。先端部は欠損しており、残高は0.7㎝である。この突起部には表から裏面に回る２条の平行沈線が引かれ、内部が赤彩されている。鞘部は失っているが、その部分に人物埴輪との接合部があったのであろう。

形状や文様から鹿角装大刀を表現したものと推定されるが、木装大刀にもこの型式のものがある。胎土は細砂を少量含み、凝灰岩粒、角閃石、石英、チャート、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好だが、表面は少し粉っぽい。外面は淡黄褐色、器肉は青みを帯びた灰色を呈する。

○靫負人の負う靫

117は靫負人埴輪の背負う靫の破片である。５Ｔ１区２層の注記がある。後円部墳頂からの出土である。報告書第52図３の靫負人埴輪の負う靫の矢筒上端部に付く飾り板と形状と文様が全く一致しており、同工品がもう１体あったことがわかる。

製作は板造りで、端部はヘラ切りされている。形状は下辺は水平であるが、上辺は緩やかな刳り込みがあり、側辺も曲線を描いていたと推定される。したがって、左右の角は丸い突起状をなしていたと考えられる。復原される文様構成は、わずかに内湾しながら斜行する平行沈線が左右対称の位置に引かれ、これに挟まれる上辺には４本、下辺には３本の水平な沈線が引かれる。

調整は内面外面ともに横位ナデであり、内面（剥離面）には矢箱本体に施されていたヨコハケの雌型がわずかに残る。内面は全体が剥離面であるが、平滑で、粘土滓が付いていないので、本体との密着度は低かったのであろう。胎土は細砂をわずかに含む精選土で、凝灰岩粒と大粒の酸化鉄粒が目立つほか、角閃石とチャートが観察される。焼成は良好だが、表面は少し粉っぽい。外面は橙褐色、器肉と剥離面は灰褐色を呈する。

○靫負人１

119は報告書第52図3に背面、左側面、右断面図が掲げられている靫を背負う人物埴輪である。今回、体部前面の復原が大幅に進んだので、正面図を新規に作成し、断面図についても変更が生じているので、再実測して掲げることにした。４Ｔ造出、内堀４Ｔ、内堀１Ｔの３種類の注記がある。

背中には板造りで箱形の大きな靫を取り付けている。その製作手順は側板２枚を背中に貼り付け、これを底板で連結した後に、外表の板を貼って、中空の矢筒部とする。次に、首の少し下にマウントとなる粘土を付け、そこに背板上部の飾り板を取り付けた痕跡があるが、今は失われている。矢筒の上端にも線刻の直弧文のある飾り板が貼り付けられている。

腰には幅の広い粘土帯を貼り付けて帯を表現している。結緒の表現は正面にはなく、ユビナデの痕跡からみて、左腰部に斜めに取り付けられていたようである。ところで、靫を背負う埴輪は、もともとは弓を伴っていたと考えるのが自然である。胎土と色調のよく似た弓の破片（74）があり、同一個体の可能性がある。あいにく残存部に弓の接合痕を見いだせないが、残存しない左肩と左手に接着していた可能性が高い。また、右腕を下げる姿態であり、弓を引き絞る状態（118はその可能性が高い）とはならないので、左手で弓筈を握り、肩に担いでいる状態を表現したものであろう。

頸部は特別細く（直径6.5㎝）、長い特徴を有しており、報告書第52図2の小型頭部（№３の注記が

あり、造り出し西側外堀のブリッジ北より出土）と法量や作りが共通する。両者は別個体であり、焼成も少し異なるが、靫負人が複数個体存在することから、同工品が接合する可能性が極めて高いものと思われる。なお、第52図2の小型頭部は簡単な頭部防御具（矧板の表現がないので革製を表現したものか）を付けている。共通の胎土を持ち、海面骨針を含む。おそらく同一工人の製作であろう。

円筒基部との接続法は、円筒部と体部を一連に製作し、外面に裾部を貼り足す通有の方法ではなく、円筒器台上端部を外下がりの斜面とし、この部分に裾部を接合し、連続的に体部を成形する方法が採られている（断面図参照）。体部は腋までが粘土紐巻き上げ成形であるが、内外面の調整が丁寧なため、接合痕はほとんど残っていない。腋から上位は前胴と背を粘土紐積み上げで別々に成形し肩部で両者を綴じ合わせている。この工程では肩の部分に孔が残るように製作し、孔の周縁部を薄く摘み出しておいて、その外側に粘土板を丸めて製作した中空の腕（上側に綴じ目がある）を嵌め込むようにして接合し、補強用の粘土を少し（脇の下の部分ではやや厚い）貼り足して、固定している。頸部はあらかじめ成形したものを首孔に接合し、肩との間に生じた隙間を粘土塊で充填している。

体部の外面調整は裾から胸までは左上がりのナナメハケ（9本／2.0㎝）、胸より首までは様々な向きにユビナデ調整する。また、腕を接合した後に、体部から腕に向かうユビナデが施されている。胸部のユビ押さえ痕は接合不十分のため、後で手を加えた痕跡である。内面調整は縦位の強いユビナデである。

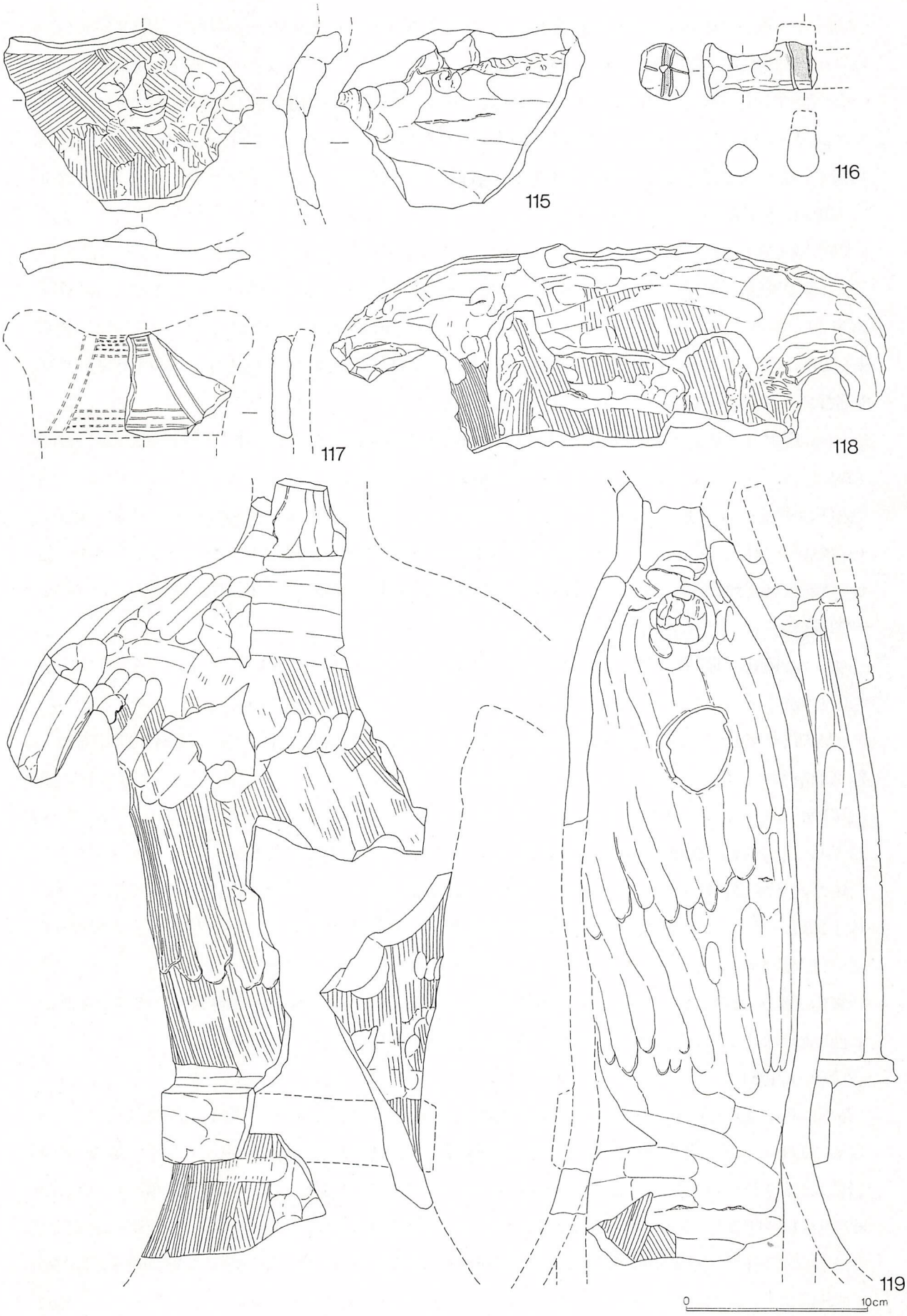
胎土は小礫と粗砂を多量に含み、角の取れたチャートが最も多く、他に凝灰岩粒、酸化鉄粒、石英、角閃石、長石、片岩、海面骨針が観察される。海面骨針は7倍ルーペを用いた精査でわずか数点しか確認できなかった。焼成は器肉は堅緻だが、表面がやや軟質で粉っぽい。内外面は橙褐色、器肉は黒褐色を呈する。

○靫負人2

118は報告書第56図1に正面、右側面、左断面図が掲げられている人物埴輪である。今回の観察で背面に靫の剥離痕のあることがわかり、靫負人であることが確実となったが、報告書には背面図がなく、このことにも触れられていないので、実測図を掲げて説明を加えることにした。造出部外堀4T No.1の注記がある。

体部の胸から首に至る部分と両腕が残存している。体部は腋までが粘土紐巻き上げ成形で、腋から上位は前胴と背を粘土紐積み上げで別々に成形し肩部で両者を綴じ合わせている。この工程では肩の部分に孔が残るように製作し、孔の周縁部を薄く摘み出しておいて、その外側に粘土板を丸めて製作した腕を嵌め込むようにして接合し、補強用の粘土を少し貼り足している。

背面には靫の剥離痕が明瞭に残る。左右2箇所に垂直方向の矢筒の側板を貼り付けた痕があり、外縁には撫で付け痕を伴う。縦方向の剥離痕に挟まれる上部には水平方向の剥離痕があり、背板上部の飾り板を取り付けるための土台が貼り付けられていたとみられる。腕は左腕を体側方向に伸ばし、右腕を前方に出す所作から、弓を引いていた可能性を考えうる。この場合、弓は左手に握られていたことになる。左肩に115で推定されたところの弓を固定するための粘土塊が認められないことは弓を左肩の担いで携行する姿態でなかったことを示しているので、この推定の傍証となろう。右肩には



第16図　稲荷山古墳出土形象埴輪実測図12

縦3.5㎝、横3.2㎝の楕円形状の剥離痕があり、何かが取り付けられていたようだが、詳細は不明である。

外面調整は体部にナナメハケ（12本／2.4㎝）を施した後に、腕を接合し、体部から腕にまたがるナデ調整を行っている。胎土は小礫と粗砂をやや多く含み、チャート、凝灰岩粒、酸化鉄粒、石英、角閃石、長石が観察される。焼成は普通で、表面が少し粉っぽく、風化気味の部分もある。内外面は橙褐色、器肉は暗黄褐色を呈する。

○小型人物塑像

121は中実製作の小型人物塑像である。左腕の付く体部（a）と右足（b）の2片があり、前者には6Ｔ1区表土、後者には2Ｔの注記がある。後円部墳頂及び後円部墳丘南側中段からの出土である。足が自立するものではなく、足の裏面に台部への接合痕もないので、倚座像となる可能性があり、復原図を掲げた。

体部は腰がくびれ、裾の開く形状をなしており、腕を前方に突き出している。襟や帯などの着衣の表現はない。足は指の表現がなく、中央部が尖るので履を履いている状態とみられる。成形法は中実の粘土塊をユビ押さえで成形し、腕と足を接合する。外面調整は布目を伴うナデである。表面は暗赤色の彩色が全面に施されている。胎土は粗砂を少量含み、角閃石、次にチャートが目立ち、他に、凝灰岩粒、酸化鉄粒、石英、長石が観察される。焼成は普通で、表面が少し粉っぽい。外面は淡黄褐色、器肉は暗灰褐色を呈する。

4　馬形埴輪の特徴

○立髪

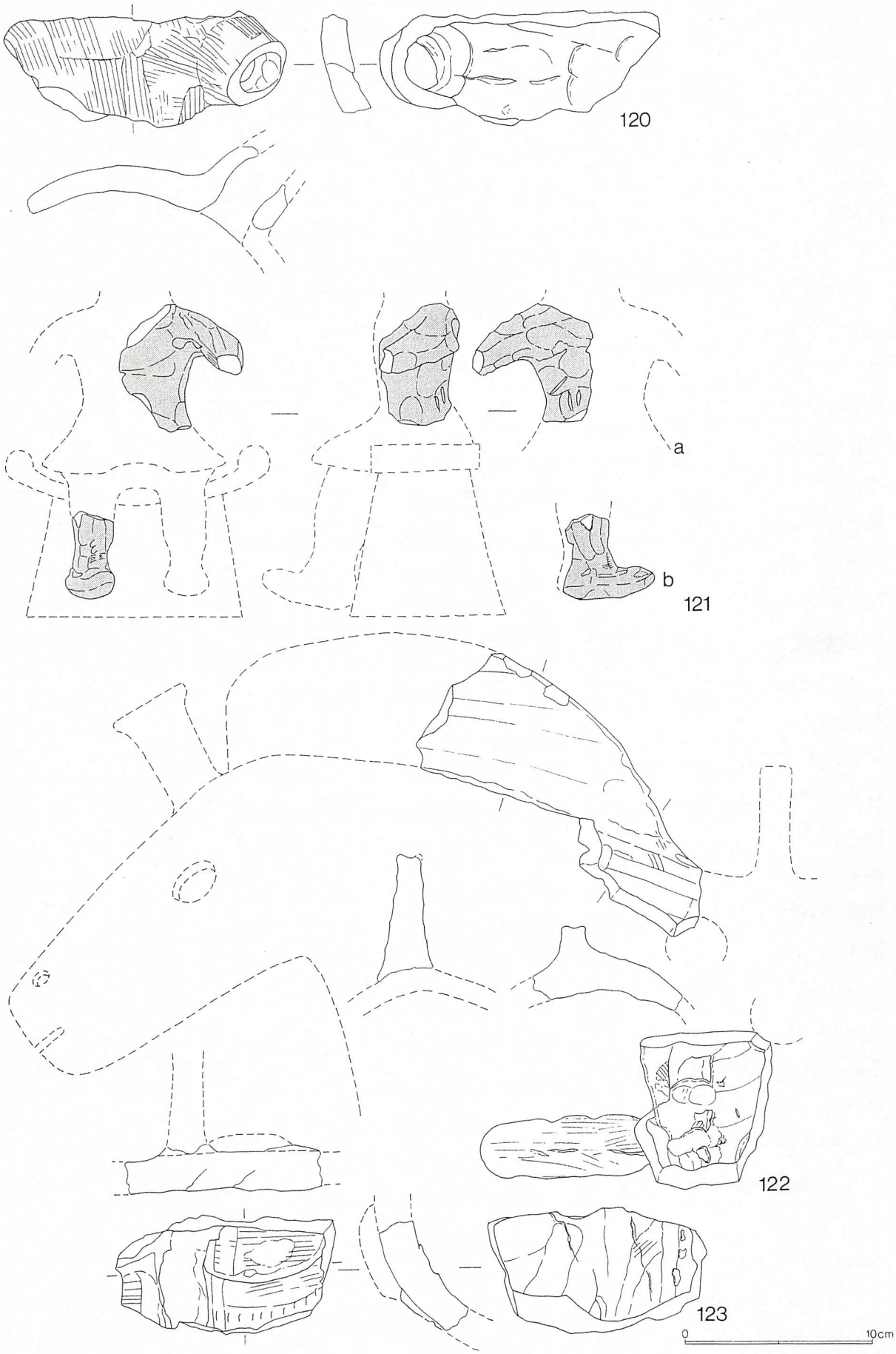
122は馬形埴輪の首と立髪の一部である。内堀4Ｔの注記がある。体部は内面に垂直方向の粘土紐接合痕が残り、断面が左下がりなので、横断面アーチ状に掛け渡した粘土紐を首から胴の方向に順次接合しながら成形したものである。立髪は板作りで、横断面形は台形状を呈しており、端部での厚さは1.3㎝、接合部での厚さは3.0㎝を測る。

体部の外面調整はヨコハケ（9本／1.5㎝）、内面調整は雑で、ハケ調整後にユビナデを加えるが、粘土紐痕が明瞭に残る。立髪の外面調整は横位ナデ、端部はヨコナデによってくぼむ。立髪端部付近の体部側面にはヘラ切りによる小円孔が穿たれている。胎土は小礫と粗砂をやや多く含み、大粒の酸化鉄粒が目立つほか、チャート、凝灰岩粒、、石英、角閃石、片岩が観察される。焼成は普通で、表面が少し粉っぽい。外面は淡橙褐色、器肉は灰褐色を呈する。

○鞍と鞍褥1

123は鞍の破片で鞍橋の欠損した基部が残る。内堀4Ｔの注記がある。器肉は2.0㎝前後の厚手の作りである。鞍橋の外側には粘土紐を貼って尻繋または胸繋が表現されている。また、鞍橋の内側にはヘラ先刺突が等間隔で弧状に行われており、居木部分に付く鞍褥の縫い取り表現とみられる。その内側には楕円形の粘土塊の剥離痕があるので、鞍褥は高まりの部分が表現されていたと推定される。体部は内面に垂直方向の粘土紐接合痕が残り、横断面アーチ状に掛け渡した粘土紐を順次接合しながら成形したものである。

体部の外面調整はヨコハケの後にナデを加える。内面調整はナナメハケの後に縦位のユビナデを加



第17図　稲荷山古墳出土形象埴輪実測図13

える。胎土は小礫と粗砂を少量含み、チャート、酸化鉄粒、凝灰岩粒、石英、角閃石のほかに海面骨針が僅かに観察される。焼成は良好だが、表面が少し粉っぽい。外面は橙褐色、器肉はチョコレート色を呈する。

128は同一個体の鞍褥部の高まり部分の剥離したものである。123の剥離痕には接合しなかったので、他の3箇所のいずれかに付いていたのであろう。平面形は楕円形を呈し、縁の部分には、ヘラ先刺突が等間隔で2重に巡る。成形は板造りで、内外面とも丁寧なユビナデ調整後施されている。また、内面には本体のハケ目の雌型が付いている。

○鞍と鞍褥2

124は鞍の破片で鞍橋の一部が途中まで残存している。池の注記がある。器肉の厚さは1.5cm前後である。鞍橋の外面には粘土紐を貼って尻繋または胸繋が表現されている。おそらく綏の表現も伴っていたであろう。鞍橋の内側には楕円形の剥離痕があり、居木の上部に鞍褥の表現があったとみられる。横断面図から復原すると腹部の幅は約30cmである。体部は内面に垂直方向の粘土紐接合痕が僅かに残り、横断面アーチ状に掛け渡した粘土紐を順次接合しながら成形したものである。体部の外面調整はヨコハケ（8本／1.7cm）、内面調整は横位のナデである。胎土は粗砂を少量含み、チャート、酸化鉄粒、凝灰岩粒、、石英、角閃石が観察される。焼成は良好だが、表面が少し粉っぽい。内面は橙褐色、器肉は灰色を呈する。

○鞍と鞍褥3

126は鞍の破片で鞍橋の一部が途中まで残存している。池の注記がある。器肉の厚さは1.8cm前後である。鞍橋の内側に接する居木の上部に粘土貼り付けで鞍褥の表現を行う。平面形は半月形で、鞍橋側が高く斜面をなしている。全面にわたってヘラ先刺突が無数に施されている。刺し子を表現するものであろう。体部は内面に垂直方向の粘土紐接合痕が僅かに残り、横断面アーチ状に掛け渡した粘土紐を順次接合しながら成形したものである。外面調整はユビナデ、内面調整はナナメハケの後に斜位のユビナデを加える。胎土は粗砂を少量含み、石英が目立つほか、チャート、酸化鉄粒、長石、角閃石が観察される。凝灰岩の含有は少ない。焼成は良好だが、表面が少し粉っぽい。外面は淡赤褐色、内面と器肉は淡茶褐色を呈する。

○尻尾

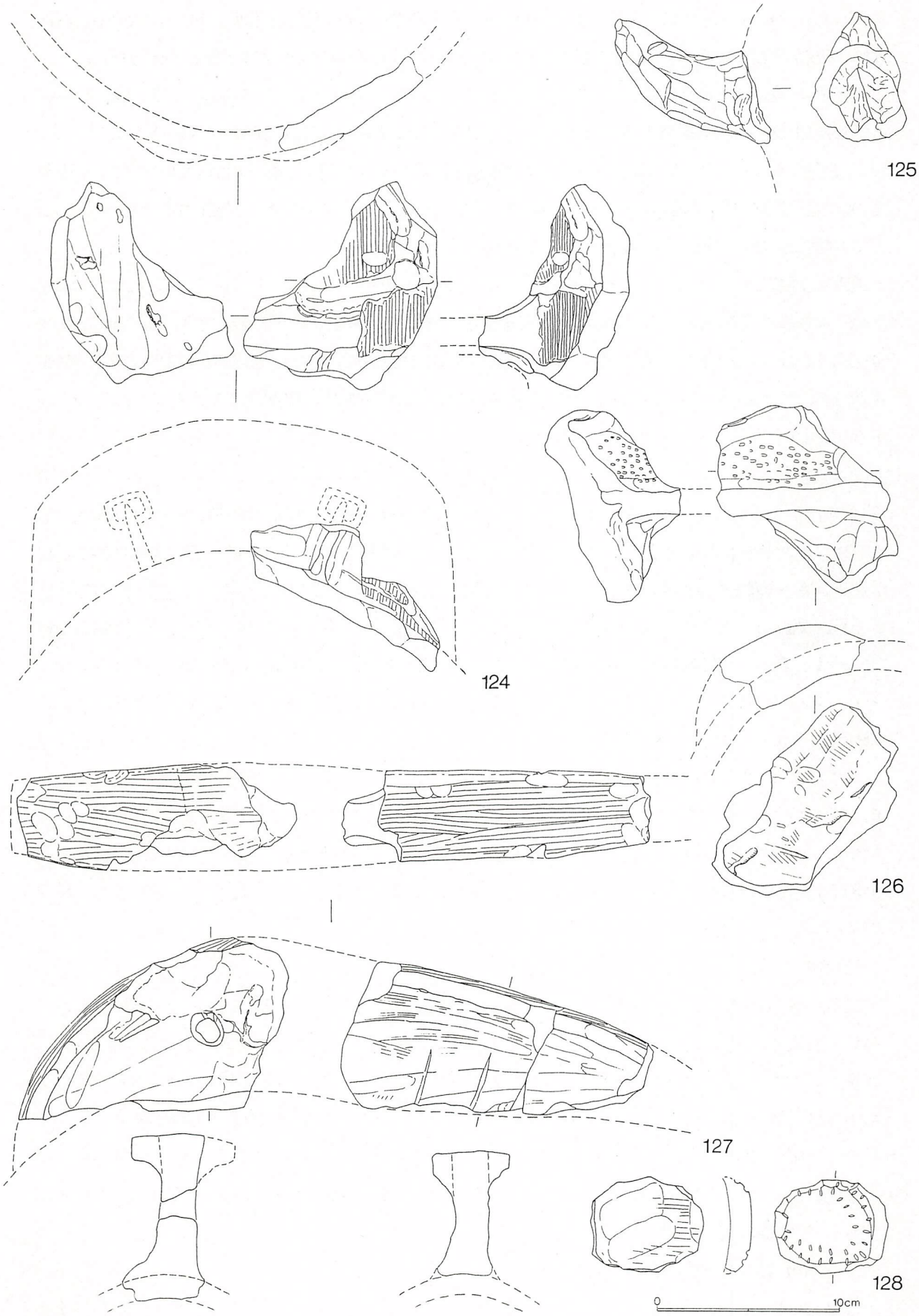
125は動物の尻尾である。池の注記がある。上へ湾曲し、先端の尖る形状からみて、馬の可能性が高いが、紐巻きの表現は伴っていない。三角形の粘土板を丸めて、2辺を綴じ合わせて中空に作る。臍を用いずに、端面を本体に貼り付ける接合方法を採っている。長さ10.0cmの小型品であり、馬自体も小型の個体となろう。外面調整は長手方向への強いユビナデ、内面は絞り目が顕著である。

胎土は細砂を少量含み、凝灰岩、石英、チャート、酸化鉄粒、長石、角閃石と海面骨針が僅かに観察される。焼成は半須恵質で、良好にして堅緻だが、表面が少し粉っぽい。外面は還元がかって灰色を帯びた茶褐色、内面と器肉は灰色を呈する。

5　動物埴輪の特徴

○猪形埴輪の立髪

127は動物埴輪の立髪である。造出の注記がある。接合しない同一個体2片からの復原では、屈曲



第18図　稲荷山古墳出土形象埴輪実測図14

が少なく、下辺がほぼ水平となるので馬ではなく、猪の立髪（みの毛）と推定した。なお、穴のあいている破片は報告書第58図5として実測図が掲げられたもので、馬のたてがみと推定されていた。

板造りの立髪の上縁部両面に凸帯を貼り付けていわゆるＴ字縁とする。Ｔ字縁は馬形埴輪の立髪の例はかなりあるが、猪の例は他に知らない。おそらく馬の影響で製作された猪であったのであろう。現存長が35㎝あり、厚みも2.0㎝強あるので重量は相当のものである。幅の一番拡がる部分に円形小孔があり、片側から竹管状のもので刺突穿孔されている。この孔に棒を通し、吊るか棒で支えるなどして立髪の取付時に重量の軽減を図ったものであろう。

側面の調整は横位ユビナデ、上面の調整は粗い長手方向のハケ（6本／1.3㎝）である。なお、観察のとおり猪の立髪であるならば、体調80㎝前後の大型の個体となろう。胎土は小礫と粗砂をやや多く含み、チャート礫と石英が目立つほか、凝灰岩、酸化鉄粒、長石、角閃石が観察される。焼成は普通で、表面が少し粉っぽい。外面は肌色に近い淡赤褐色、器肉は橙褐色を呈する。

おわりに

稲荷山古墳出土形象埴輪の資料報告もパート２を迎えた。平成15年度は１点でも多く観察し、できる限り実測図を作成することに努めた。このために、石膏入れが残ってしまい、写真撮影も済んでいない。まだ動物埴輪や器財埴輪など、報告に値する資料が少し残っているので、来年度も整理を継続し、その成果と今回の写真図版を合わせて次号に報告することにしたい。なお、家形埴輪の復原図作成をはじめ、埴輪の多角的な検討と総括など今後に残された課題は多い。